

TOTO

2010年 夏号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通行



行方知らず
照信、
藤森、
特集

Special Feature / Japanese Architecture & Home

20世紀末、建築界に始まる異形の建築のなかで、画然とした存在感を誇るフジモリ建築。「フジモリ」とかっこ付き、表現の独自性は、建築界の基本をいささか揺さぶっている。モダンを拒否し、伝統を離れて、いずこへ行くのか。草が生え、櫓が組み、石が載る。生木が裂かれ柱が屹立する。縄文建築団を自称する素人集団が支える現場。あっけにとられてもその来し方方知らず。とはいえその原点を探りたくなるのが人のつね。あらためて象のごとき藤森照信を特集する。



*ギャートルズ=1965~75年『週刊漫画サンデー』(実業之日本社)に掲載された園山俊二原作のギャグ漫画の主人公。架空の原始人。

——これ、小さく孫悟空が飛んでいますね。
「ギャートルズ*化している(笑)」

Fujimori Terumoto

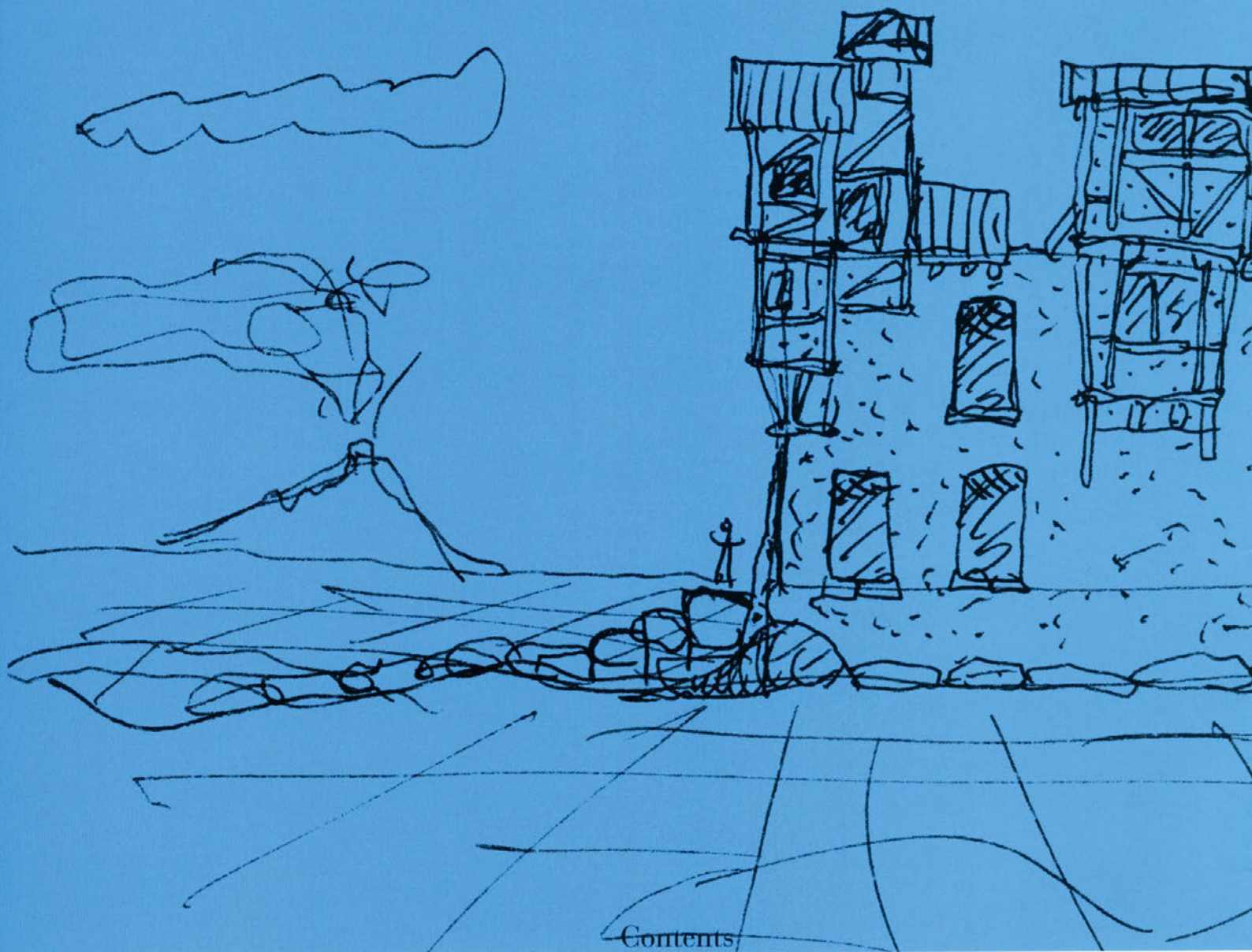
インタビュー=藤森照信	4	シリーズ 旅のバスルーム78 文 スケッチ=浦一也 ラマダ プラザ パーゼル(スイス パーゼル)	52
「入川亭」「忘茶舟」	14	最新水まわり物語24 新千歳空港国際線旅客ターミナルビル	54
内田祥士+大嶋信道+川上恵一	36	地域に生きる会社51 北信商建	58
文=藤森照信	46	ギャラリー 間で展覧会をします デイヴィッド アジャイ展「OUTPUT」	60
文=南 伸坊	50	news file	62

特集

藤森照信

Special Feature / Fujimori Terunobu Unbound

行方知らず



Contents

- | | |
|--------------|------------------|
| 特集1 / インタビュー | 「タンポポハウス」絵解き |
| 特集2 / ドキュメント | 台湾に茶室をつくるぞ! |
| 特集3 / 座談会 | 夜中のファクスで始まって |
| 特集4 / コラム | 藤森語録 |
| 特集5 / エッセイ | 藤森さんがあんなに楽しそうな理由 |

TOTO
通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 491
Summer 2010

「タンポポハウス」絵解き

藤森建築の発想の原点はどこにあるのか。この問いかけは多くの人の頭に浮かぶことだろう。最初期のイメージの摩訶不思議、湧き上がるイメージの爆発、そして定着への経路。その道のりを時系列的に追っていけば発想の流れをたどることができるのだろうか。「タンポポハウス」(1995)のスケッチを前に、藤森照信さんに直接インタビューを試みた。解明できるかどうかはまた別の話。とはいえ建築家自身ですら探ったことのない無明の原点、かすかな手がかりが見えれば目的は達せられたといえるだろう。インタビュー・まとめ／中原洋



Number

1

1990

↑
元旦に描かれた最初のプランには木造への執着が強く見える。ハーフトインパー、城、物見櫓、家の中の火。



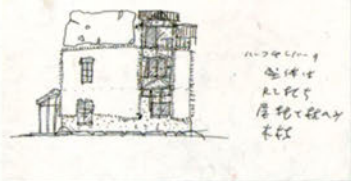
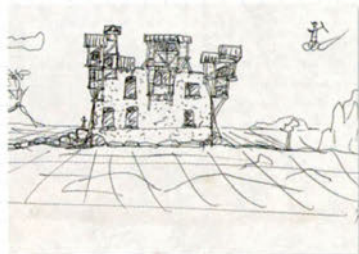
あのとき こんなことを 考えていた

Number

2

1990

初日の第2プラン。やはり幼い日々の夢、
砦であり、空には孫悟空が飛ぶ。

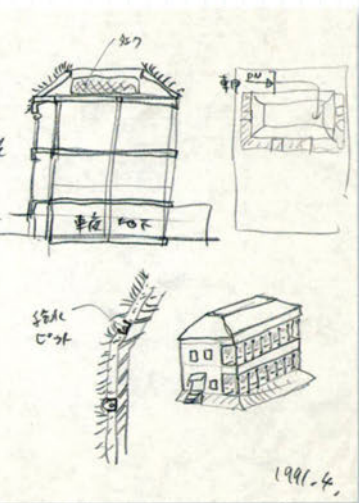


Number

3

1990

木の屋根と柱、草の外壁、そして差しかけ
小屋、ここでも物見槽がある。

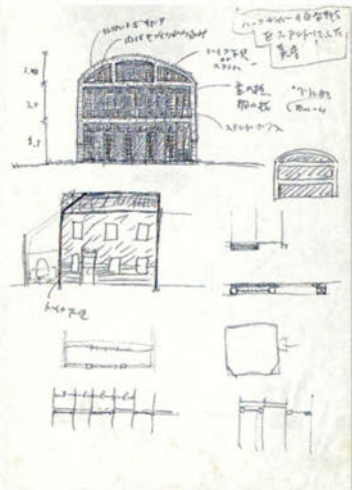
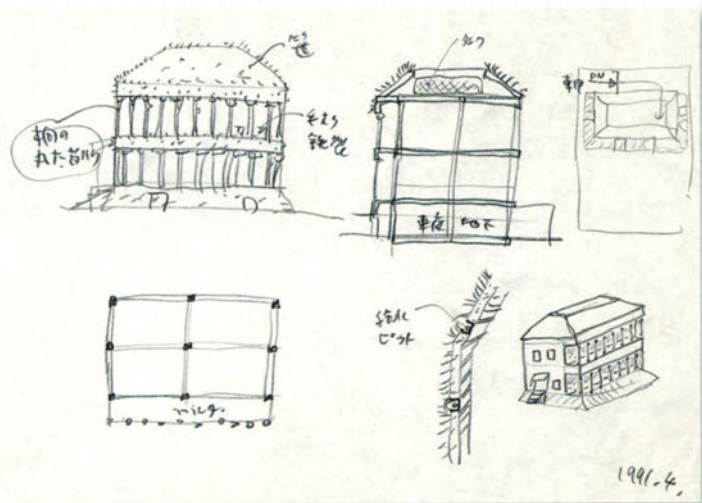


Number

6

1991

桐の丸太を列柱にしてベランダを意識した
プランが現れる。

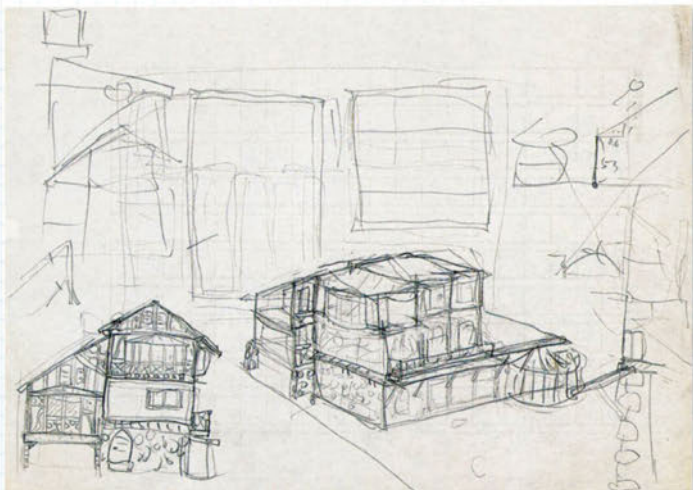


Number

5

1991

屋根の上の芝の定着を考えた案。「ハーフェ
インバーの白壁部分をステンドグラスにし
た美学」とある。

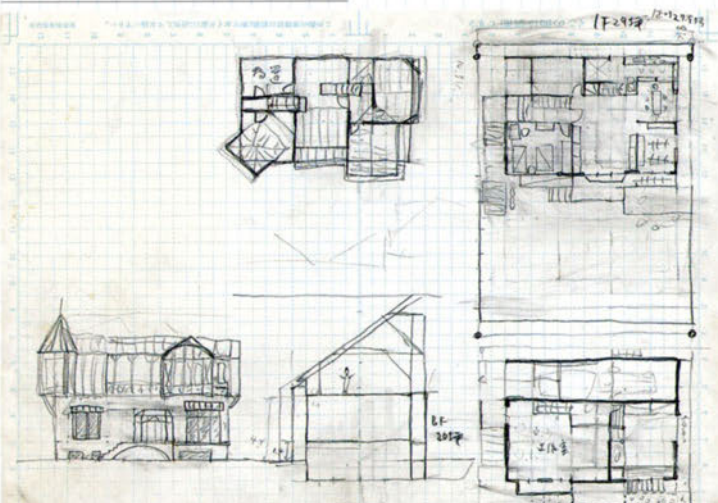


Number

4

1991

長年暮らしたセキスイハイムM1を1階に
取り込もうとした案もあった。



Number

7

1991

あらためてチューダースタイル。これはご
本人も反省している。

——時系列的にスケッチを拝見するのはじつにおもしろいものですね。

藤森照信 磯崎(新)さんに言われたんですよ、こういうことを建築家がしちやいかんと。建築家は途中の案を見せない。後で都合のいいのだけ選ぶものだって(笑)。

——でもこのご自邸「タンポポハウス」(1995)のスケッチを見ると、若い建築家にとっては藤森さんだって苦労するんだっていうところがみえてうれしんですよ。

藤森 苦労っていうか、本人としてはやはり恥ずかしい(笑)。

1990年元旦スタート

——確かにこの1の案は、すごく変ですよね(笑)。

藤森 「こじき城」って書いてあるもんね。

——「こじき城」って見えますが、「雪舟」「こじき城」「ハーフトインバー」「エコロジー」、4つのキーワードとあります。

藤森 雪舟って書いてあるんだ。忘れてた。雪舟の絵の岩の感じなんだろうな。

——ハーフトインバーも不思議なんですけれど。

藤森 木を大量に使いたかった。この頃は木のガウディ (Antonio Placido Guillermo Gaudí y Cornet) を考えていたんですよ。木を大量に使うとき、日本の真壁は限界があります。ハーフトインバーっていうのは、ほとんど組構造に近い木の使い方。どれが効いてるかはつきりしない(笑)。ぐじゃぐじゃに入っているのをやりたかった。

要するに日本の木造については未知の可能性を感じない。日本のすぐれた才能が十分注入されていて、やり尽くされた。木造に興味はあるけれど、もうこれはハーフトインバーでいくしかないんじゃないか、

と。今でもその思いは強い。

——1と2の案は、かなり近い日のようですね。

藤森 ほとんど同じぐらいですね。よく似てるけれど、2のほうが建築に近づいている。

——これは皆つぽいですよね。

藤森 「土」化したんだね。最初のはあまり土の要素がないなあ。

——これ、小さく孫悟空が飛んでますね。

藤森 ギャートルズ化(2ページ*参照)している(笑)。

——物見槽がありますね。

藤森 高いところが好きなんですよ。

率直にうかがって、子どものときの木登りのイメージでしょうか。

藤森 そうね、木登りとか陣地をつくるとかね。戦争ごっこみたいなの、皆ごっこみたいなの、そういうイメージじゃないですかねえ。

——建築家というのは、そういう本能を抑えている気配がありますよね。

藤森 それはモダニズムが抑えた。モダニズムは個人的体験を嫌いますから。根拠が科学・技術ですから。だからモダニズムは文学なんて許さない。もし、本当のモダニズムが現れたら個人性は意味ないですから。そういう点でいくと、番純粋なモダニストはグロピウス (Walter Adolph Georg Gropius) ですね。

平面は考えない

——次の3ですが、これは完全に土ですよ。物見槽もある。

藤森 これが後まで生きてるんです。草が生えるな。土と木と。度、草は消えたけれどもう 度出てきたんですよ。

——ここまででは平面図は描いてないんですね。

藤森 そうですよ。そう、平面はね、伊東豊雄さんに言われたけど、おまえの平面は平面って言わないって。間取りだって(笑)。今、平面はプログラムって言う。

——平面はどうにでもなると思っっていますか。

藤森 平面は別にそんなに難しいって感じじゃない。というより、難しいことをやろうとしない。

平面が決定的に意味をもち出したのは、ライト (Frank Lloyd Wright) からですね。平面は、簡単にいうと壁で囲まれてつくられてきたわけですよ。それをライトは日本の建築に学んで取っ払った。彼のプランが、現代まで続くプランの流動性をもたらしたわけです。それが結局バウハウスにつながるんです。具体的に言えば、リース (Ludwig Mies van der Roë) につながる。あの人あたりから平面が重要な要素になってきた。でも僕はそこあまり興味がありません。

今でも平面は重要です。平面は社会性をもちますから。家族の関係にかかわります。たとえば台所を中心にするとか、座敷をもつとか、あるいは完全に家族の部屋を中心にするとか。今は台所と居間が中心ですが、これは奥さんと子どもですよ。お父さんの存在は薄くなっている。そういう社会性を直接的に反映するのが平面ですね。

僕はその時代の 般的平面でいって考えている。

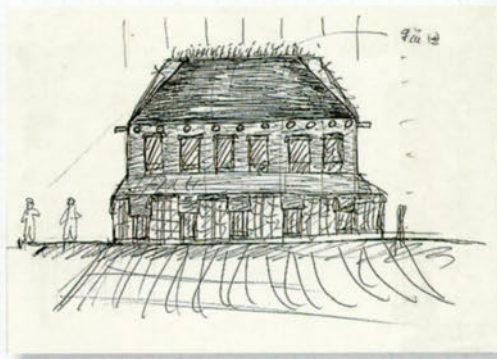
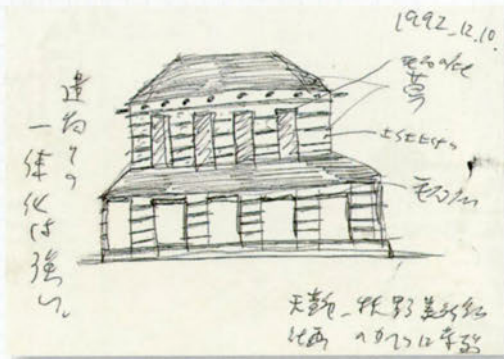
——最終プラン(13ページ)階平面図・写真参照)

では玄関を入れて右手に炬を切った主室がありますね。「居間であり、客間であり、茶室でもある」とあります。客を意識化されていますか。

藤森 いや、主室という考えです。ワンルームでもいいという思いはあるんです。なんでこうしたかな。ワンルームでもいいけれど、僕は座りたいんですよ。おそらく食卓の横で座るとテーブルの底が見えちゃう。室内犬状態(笑)。広い部屋で距離がとれればい

Number
9 1992

石を張り、緑を带状にした最終に近い案。

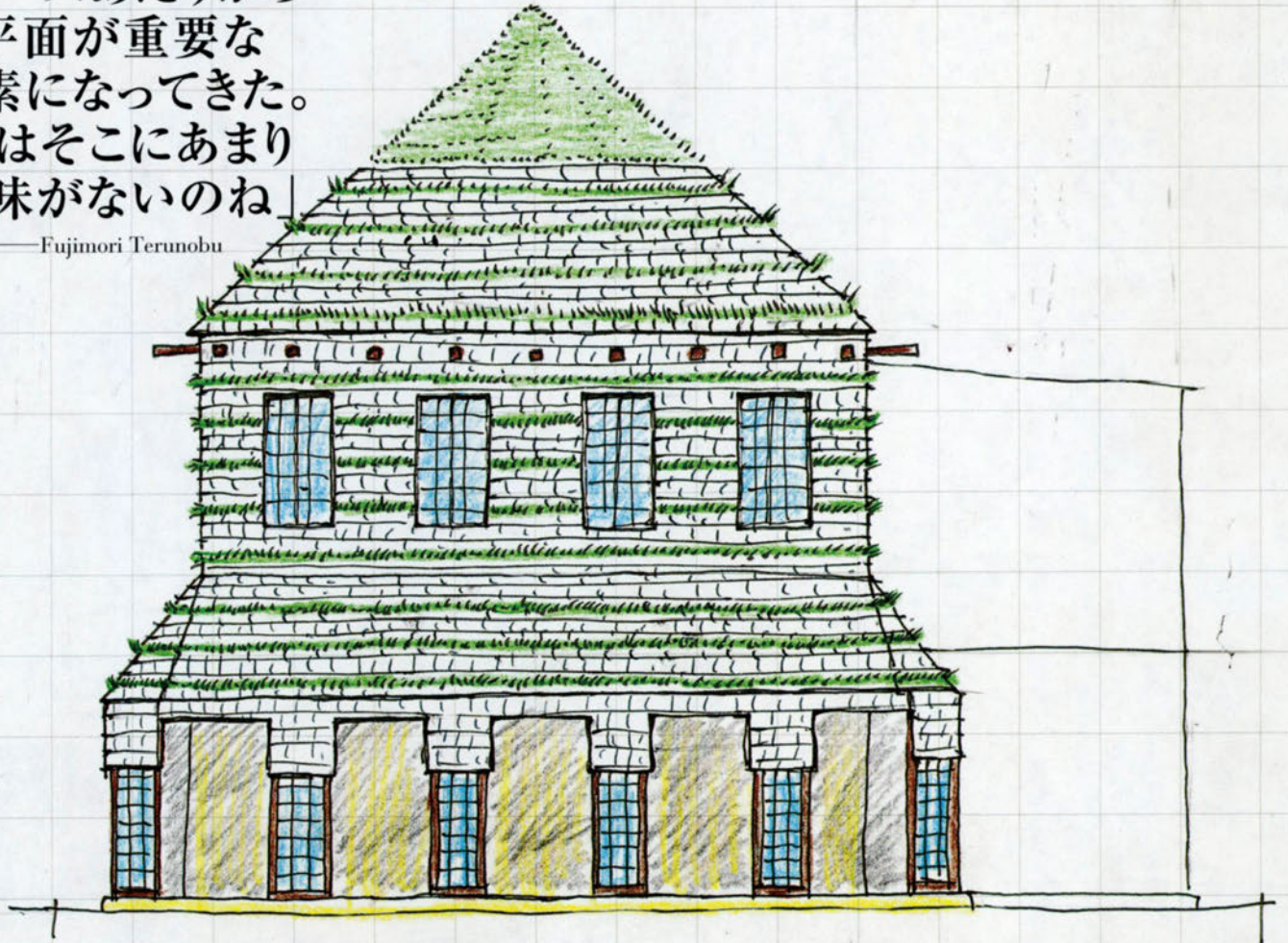


Number
8 1992

原点の芝屋根と草壁の検討。

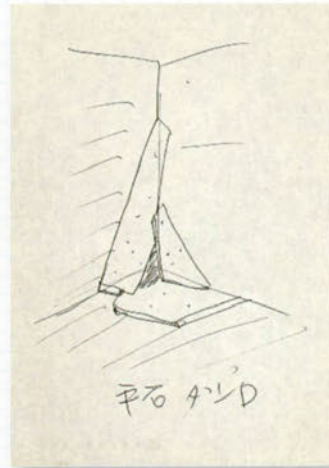
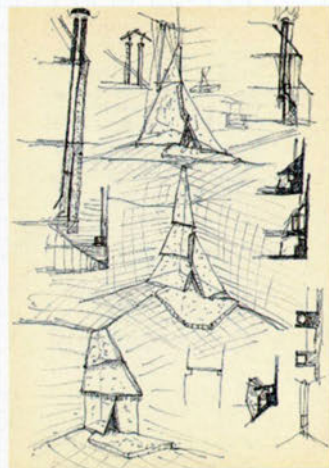
「ミースあたりから
平面が重要な
要素になってきた。
僕はそこにあまり
興味がないのね」

— Fujimori Terunobu



Number
10 1993

芝屋根は三角屋根になったり。壁の緑は带状へ。右手の線描きは食堂兼台所部分。



Number
12 1992

鉄平石を使った暖炉のスケッチ。バリエーション。

Number
11 1994

故郷の鉄平石を使いたかった。

いけど。

ゴロゴロする場所を確保したい。とくに炉が好きです。火があつてゴロツとする。僕は小学校2年生まで炉が切つてある板の間で食事をしていました。囲炉裏のまわりで。普通、農家は畳と板の間がゾロですが、ウチは畳は上段の間になっていて、殿さまをお泊めする家だったんですね。そういう経験が平面上に出ているのかもしれない。

—— そうですね。平面図は「前の家に似ている」って家内が言つた。言われてびっくりした。

セキスイハイム

—— 91年のこの4はちよつとイメージが違います。藤森 ああ、これは全然違う理由でやつていました。前に住んでいたセキスイハイムM1をそのまま使おうとして。建て替えの最中にどこに住むかという大問題があつて、場合によってはここに住みながらやるといふわけ。これだけ異様ですよ。考えたけれどやつぱりだめだった(笑)。

—— で、すぐ戻られたけれど、これは大地っぽいですね。

藤森 5は大地っぽいのとベランダを付けたのと両方思つたんですよ。冬は閉じてサンルーム、夏は開ける。明治の西洋館が編み出したやり方ですね。

—— 途中でこれに列柱(6)が出てきますね。これはヨーロッパの回廊ですか。

藤森 ベランダですよ、回廊じゃなくて。

藤森 桐が長野の実家にあつたからじゃないかな。それと自分で削ろうと思つたんですよ、明らかに。桐は軽くて自分で加工できる。

—— こういう大地的なおいはしているけれど、構造は全部コンクリートで考えていらした。

藤森 最初からコンクリートだったと思います。木造も考えましたけれど、土化したときから、もうコンクリートだった。そこに桐。やわらかくて好きなんです。やわらかい木を自然のままに並べたいという感じだったんじゃないですかね。

設計したい

—— この段階では本当につくろうと思つていたんですか。

藤森 それはもうはつきり覚えている。「神長官守矢史料館」(34ページ写真1〜3参照)をやつてもものすごく目覚めてしまつたんです。といつても設計の注文は入つてこないから、自分ちで考えていた。しかし、この段階ではまだお金のこととか具体的なことはあんまり考えてない。楽しんでたんだと思う。要するに想像力が行き場を失つて、自分ちでうろうろ(笑)。

—— この7は91年ですね。

藤森 これをやつたら絶対、おまえは明治の西洋建築の研究者だからと言われて馬鹿にされておしまひだったでしょ(笑)。だから迷つているときって相当めちやくちやなことやつてたんです。ほとんど方向性がないもの(笑)。

—— 8、9が92年ですね。

藤森 このへんからまとまつていけるねえ。この頃は、まだ全然、建築家と思われていない。赤瀬川原平さんの「ニラハウス」(36ページ写真7参照)が3軒目ですが、彼は神長官を見て興味をもつてくれたけれど、あれは住宅じゃないから。タンポポハウスを見て頼んでくれたんですよ。藤森さんて住宅もちゃんとやれるつて。9なんかねえ、完全に今のですね。

—— 10は93年と書いてあります。完成に近くなつていますね。11、12で突然変なものが出来てきていま

す。暖炉ですね(笑)。

藤森 つくろうと思つたんだね。結局炉になるんですけれどね。こういう暖炉をつくつてみたい、いや火がほしいと思つたんでしょうね。

—— 鉄平石への思いもありましたか。

藤森 故郷の材料で、神長官でも使つたしね。鉄平石つて火に強いし、タンポポハウスの中は洞窟化してるんですね。

—— ただここでは櫓が見えなくなつてしまふ。櫓は悩まれましたか。

藤森 じつはタンポポハウスでも櫓はつくれるようにしてあります。今でも時々、考えては楽しんでる。ただ茶室は面倒かな、と。大きな風呂をつくらうかなとも。食堂の屋上にのせられるスペースが用意してある。4畳半ぐらいの風呂。4畳半の水面をつくつて、浅い20cmぐらいので、ピチャピチャ……。想像して楽しんでる。

—— 13あたりでも鉄平石が出てきますね。

藤森 そうです。おそらくディテールを考え出して壁に草を植えることは無理だというのがわかつて、何かのあいだに挟んで植えるしかないつてことに至つたんだと思いますよ。だつてこのあたりは、ズーつと、鉄平石、土、鉄平石、草になってますもんねえ。

—— そうですね。

ディテールのこだわり

—— 14で一番興味深いのはディテールです。ニラハウスの茶室っぽい。

藤森 おそらく先ほど木でグジャグジャやるハーフティンバーとか、木のガウディとかいうようなところですね。

—— ワーグナー(Otto Wagner)の「マヰヨリカ

ハウス」(1899/10ページ写真)と書いてあります。

藤森 「ワーグナーのマジヨリカハウスを枯れ木でつくる」って、どういうことだ(笑)。ふーん、マジヨリカハウスの外壁には花が構造と関係なく描かれているでしょう。それはおそらくね、木で構造と関係なく表情をつくりたかったということだな。木をほら、針金でつないで。マジヨリカハウスのあの表現を枯れ木でつくるっていう感じだね。

——マジヨリカハウスの写真をにらんでわれわれは悩みました。

藤森 これとどういう関係だつて(笑)。こういうことは書いておかないと忘れちゃうね。

15のようなのはどうして出てくるのでしょうか。庭ですかね。

藤森 塀があつて。塀……皆みたい(笑)。ここに描いてある、跳ね橋。やつぱり庭にしろうとしたんだ。最初の塀のイメージをここでもう1回やろうとしている。これは今もやりたいねえ……。おー、いいねえ、これ。離れて茶室にしてたんだ。

——跳ね橋は異界ですね。

藤森 そう、お城のイメージとか、跳ね橋はいいですよ。どうして世界の建築家は跳ね橋をやらないのかね。あんなにおもしろいものはない。みんな知っているのに、聞いたことないでしょ、跳ね橋やつた建築家つて。

——そうですね。



植物由来のマジヨリカハウスの壁。
(写真提供=藤森照信)

藤森 いろいろ考えてはいたんだ。草を壁に植えることを具体的に考え出して、16は縦にやつたんですよ。

10あたりは点々になつていまして。草をどう植えるか、一番苦しんだところですよ。

16は筋で植える、だから相当最後のプランですね。実施設計の内田祥士君と打ち合わせ、コストのチェックをしたつて書いてある。プランも決まり、構造も相当決まり、いよいよ仕上げをどうするか。なんとも困つたんじゃないですかね。本当に困つたから。

——内田さんはどれぐらいの時間をもらつたんですか。

藤森 半年ぐらいあつたかなあ。決まらなかつたですよ、最後まで。細かいところをどうつくるか決まらなくて、工事が始まつて軀体を打ち終つても、まだ実験していたから。タンポポをどうやって壁に定着させるか。それで、鉄平石を使うことは決めていたよ。うな気がします。ステンレスの板をつくつて、その上に私がのつて作業して大丈夫かなみたいな実験を、実物でやつた記憶があります。とにかく垂直に植物を植えてうまくいった例はない。

少し角度をつければ。たとえば土手とか。

藤森 土手でもね、草が自然に生えるのは30度ぐらい。30度を超すと、アメリカカンザスグラスとか見るのもいやなような草しか生えてくれないんです。

寸法は最後に

藤森 17では寸法を考えています。寸法を出しはじめてはいるけれど、まだ公開することは考えてない。これはディテールも決まつてないですね。

——プロポーションはどういうふうにご考えていますか。

藤森 プロポーションはね、あんまり原理がなくて、唯の原理は軒を低く抑えたい。できたら軒を低く抑えて、反対側はヒューツと上に行くようなプロポーション。

——でも軒先というのは出てきてないんですね。藤森 そうそう。ペランダにするときは出ますけれどね。この場合は、日本人が編み出した、冬はガラス戸を立てるペランダだから軒は出さなかつた。でも相当ぎりぎり低く抑えてますね。

——高さはどれぐらいですか。藤森 2・0と書いてあるけれど実質1間です。1800mmちよつと……。基本的には寸法は、尺・間でやつてます。

角が生える

——さて17から、新しいことも始まつています。角が生えている。

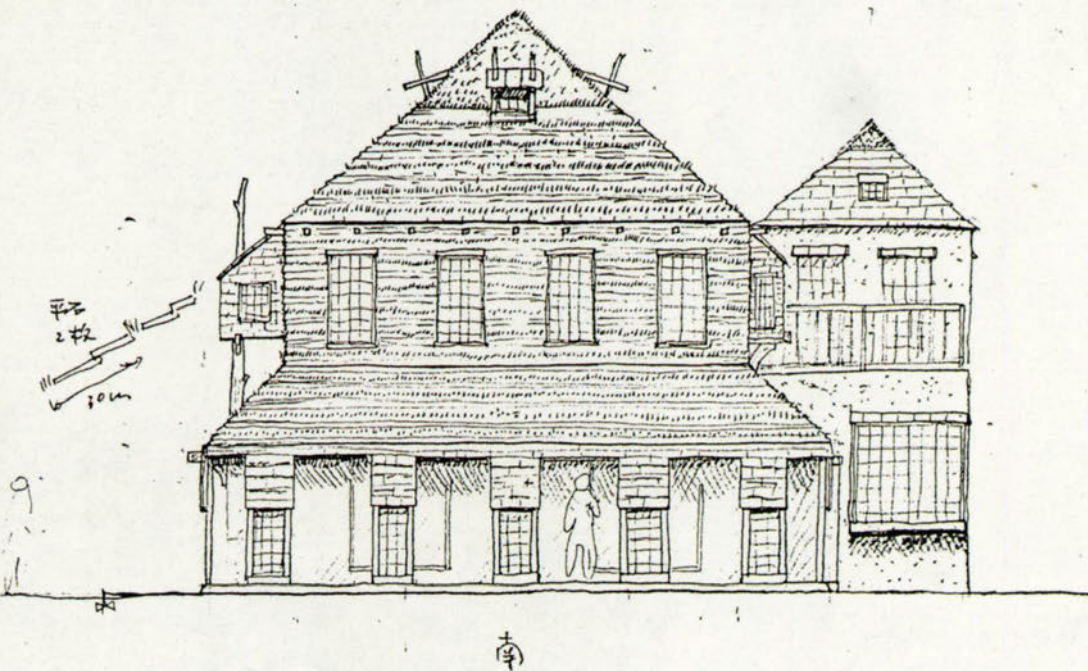
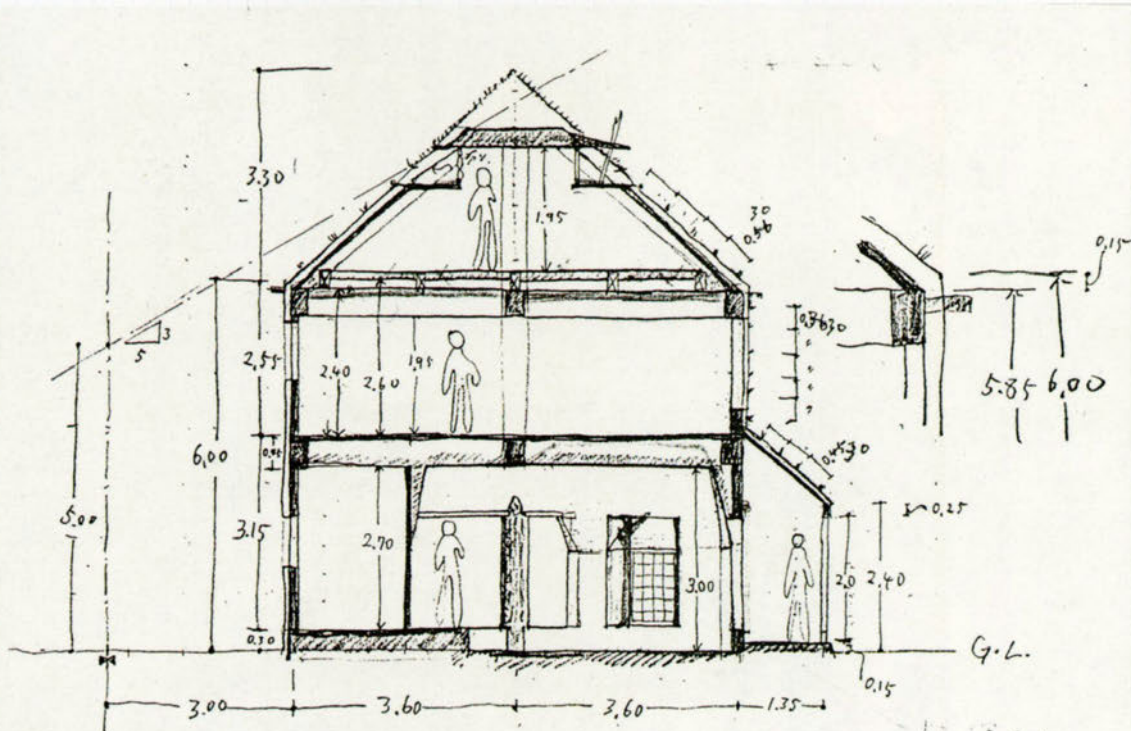
藤森 神長官はとにかく角が出て、最後、案が決まつた。

——神長官のときにドロイングの手がすべつて、角が生まれたと書いていますね。手癖とか、そういうものから作家のイメージーションが広がると聞いたことがあります。

藤森 アイデアが生まれた瞬間に、すぐ書きとめようと思つて鉛筆なんか取りに行くと、そのあいだに、

「寸法を出しはじめてはいるけれど、
まだ公開することは
考えてない」

— Fujimori Terunobu

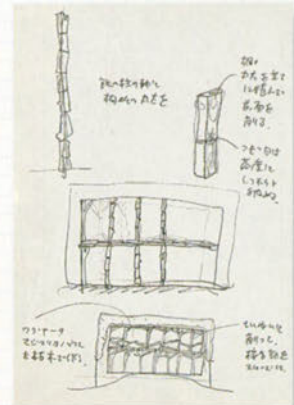


Number

17

1994

寸法も入り、おおよその形が固まった。
神長官守矢史料館以来の屋根を突き破
る柱も出現。

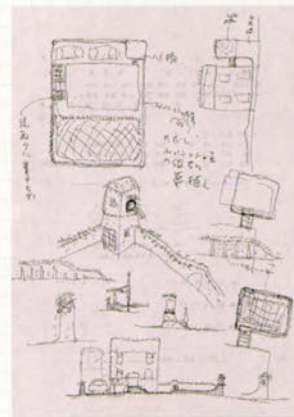


Number

14

1993

ベランダの支柱に柵をランダムにつなぎあわせ、その表現を強調する試み。後々、茶室の天井へと展開される。



Number

15

1993

物見櫓への思い絶ちがたく、庭の隅への離れのプランを考えてみる。



Number

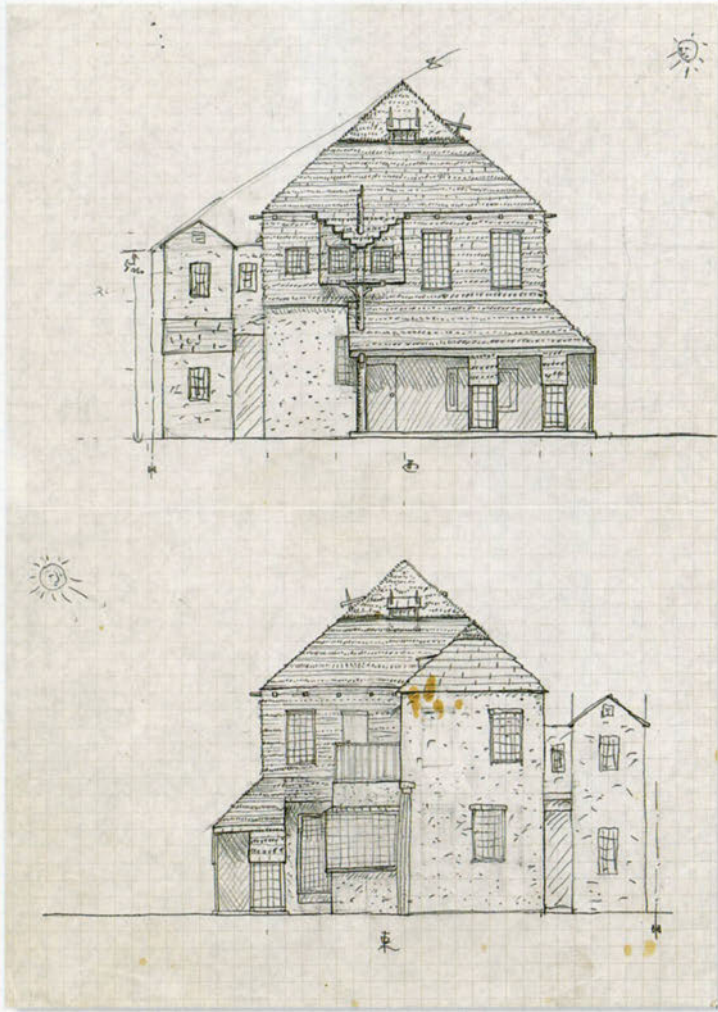
16

1994

緑を縦の帯状にすることも検討した。

「敷地同士を 切りたくないんです。 実用上切らざるをえないかも しれないけれど、 視覚的には切りたくないんです」

— Fujimori Terunobu



Number

18

1994

中心の四角い平面に、はみ出した部分、三角屋根の付属棟が複雑な屋根をつくりはじめてほぼ最終図面。ほっとした印に太陽が顔を出す。

完成の後

なぜそうしようと思いついたか忘れちゃうことがあります。神長官のときは、ものすごく大変だったから、おーっと思つて、覚えてたんですね。

—— 完成後驚いたのは塀がないということです。

藤森 僕は「塀」は一度もつくったことがない。以前は隣の農家とのあいだに塀があったんです。ところが子ども同士が同級生で親しくなつて、塀があるとうつと外をまわつて遠まわりしなくちゃいけない。危ないんですよ、小ちゃい子どもには。で、穴をあけたんですよ、ブロック塀に。それで子どもたちはそこを通っていた。そのうち隣のおじさんも回覧板とか持つてくるときにそこを通ってくる(笑)。だつたらこれはいらぬなと、とつてしまった。

じつは僕は建物の地べたからの立ち上がりが気になるんです。

木造だと下にコンクリートの布基礎、その上に木の土台があつて、要するに建物と地べたとの接点の断切状態が見えてしまう。それともうひとつは隣の敷地との関係です。それを切りたくないんです。実用上切らざるをえないかもしれないけれど、視覚的には切りたくないんです。

これが周辺の風景に少し影響を与えた。ウチが塀がなくて、反対隣の奥さんも「いらぬわね」と言つて立派な大谷石の塀を取り払っちゃつた。その結果、各家の庭を通して150mぐらいの距離で視線が通つた。

—— タンポポの手入れを自分でできていましたね。藤森 やつてた。もう絶望的(笑)。冬のあいだ、給水がうまくいなくて枯れました。最初はハシゴを

かけて、一応命綱を付けてやりました。何が一番大変かつて雑草です。放つておくと3年もすると木まで生えてくる。

—— そんなことを自分でやつた建築家は前代未聞でしょうね。

藤森 自分でやるしかないものね。一番悲惨なのは、雨の日だね、壁のタンポポに水をかけてるとき。

—— 雨が降つてもその土は乾いたまま(笑)。

最後にタンポポハウスが立ち上がったとき、ご自身で違和感を感じたとおっしゃっていましたね。

藤森 今でもある。どういう違和感かというと、周辺の郊外住宅地との違和感。明らかに変ですよ、私の家のほうが。これを建てて初めてわかつたのは、まわりの家は全部べらべら。しかし、そのべらべらこそ市民社会と郊外住宅地の本質を示しているということですね。



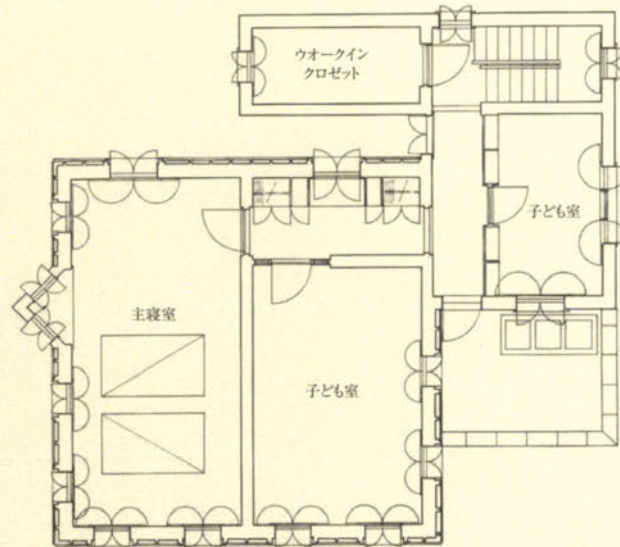
竣工当時の外観。タンポポを植えるのも、手入れ、水やりも、屋根にぶら下がりがりながら藤森さんは自分でやっている（写真提供＝藤森照信）。

竣工平面図

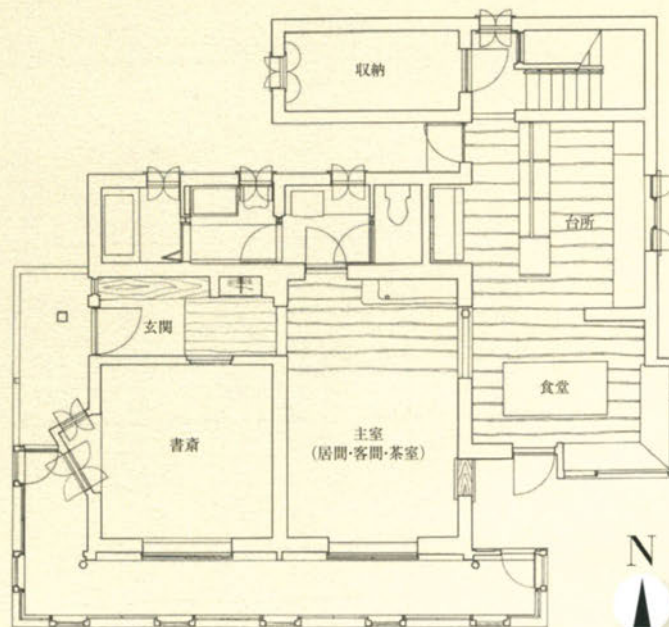
2階

0 1 2m

1/150



1階



1階主室。居間であり、客間であり、茶室でもある（写真提供＝藤森照信）。

建築概要

建築主	藤森照信
所在地	東京都国分寺市
主要用途	専用住宅
設計	建築：藤森照信＋ 内田祥士（習作舎） 構造：山本晏久（設計舎）
施工	白石建設
敷地面積	289.66㎡
建築面積	109.12㎡
延床面積	187.24㎡
階数	地上2階
構造	鉄筋コンクリート造
設計期間	1990年1月～1994年10月
施工期間	1994年12月～1995年10月
おもな外部仕上げ	屋根：SUS下地、鉄平石、一部プラントボックス 外壁：SUS下地、鉄平石、一部プラントボックス、一部ワラ入り着色モルタル材
おもな内部仕上げ	主室：床・壁・天井／ナラ、目地漆喰詰め 食堂：床／ナラ、目地漆喰詰め 壁・天井／ワラ入り漆喰木ゴテ押さえ 主寝室：床／藤ゴザ 壁・天井／ワラ入り漆喰木ゴテ押さえ



Photo by Fujisaka Akisumasa

藤森照信

建築史家。建築家。1946年長野県生まれ。71年東北大学工学部建築学科卒業。78年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。80年工学博士号（東京大学）。98～2010年東京大学生産技術研究所教授。2010年より工学院大学工学部建築学科教授。おもな著書に『明治の東京計画』（岩波書店・毎日出版文化賞）、『建築探偵の冒険 東京篇』（筑摩書房・日本文化デザイン文化賞・サントリー学芸賞）、『藤森照信の原・現代住宅再見（1～3）』（TOTO出版）、『建築探偵、本を伐る』（晶文社・第1回毎日書評賞）、『丹下健三』（共著・新建築社）など。建築作品に「神長官守矢史料館」（91）、「タンポポハウス」（95）、「赤瀬川原平邸（ニラハウス）」（97・日本芸術大賞）、「熊本県立農業大学校学生寮」（00・日本建築学会賞）、「一夜亭」（03）、「高過庵」（04）、「ねむの木こども美術館」（05）など。98年「日本近代の都市・建築史の研究」で日本建築学会賞（論文）。

4日目の帰国直前、クレーンに吊り上げられた茶室が竹の支柱の上にいる瞬間。雨季のあいまに顔をのぞかせた太陽の光を受けて、銅板の屋根がきらめく。

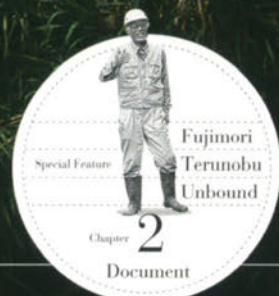
「入川亭」

作品名

「入川亭」^{イリセマテイ}「忘茶舟」^{ボウチャフネ}

設計・スケッチ

藤森照信



をつくるぞ!

2010年
4月26日から29日まで
4日間の
現地密着取材顛末

今春、東京大学を退官し、工学院大学教授に就任した藤森照信さん。隠居など30年早いとばかりにますます精力的に活動中だが、建築史家としての仕事もさることながら、注目は建築家としての設計ぶり。ここ数年、茶室づいては藤森さん、聞けば目下、台湾で茶室を建設中だという。しかも、同時にふたつつくっていて、一方は湖上に浮かぶ舟の茶室、もう一方は「高過庵」(2004/45ページ写真18、19参照)をしのぐ高さ7mの茶室。後者を支える柱は地元の巨大な竹らしい。

これまで、見たこともないものばかりこしらえてきた藤森さんが、また見たこともないものをいっぺんにふたつもつくっている。これを見逃す手はないと、完成間近の茶室の現場を藤森さんとともに訪ねることにした。

取材・文/大山直美 写真/藤塚光政

Fujimori Terunobu

ヘルメットに作業着姿が板についた藤森さん。台湾版「縄文建築団」の面々に交じり、率先して施工に参加。雨天も工期の遅れも気にせず、何をやっても楽しそう。

特集/藤森照信、行方知らず その2

ドキュメント

台湾に茶室

中華人民共和国

台湾

新竹縣



舞台は台湾の北中部、新竹縣の山中にある湖。一带には手つかずの自然が残り、夜には蛍も飛び交う。水面に周囲の緑が映り込むさまはさながら水墨画のようだ。



蒼々とした湖面に
まわりの緑や遠方の山々が
映り込む。

Fujimori Terunobu in Taiwan



写真右／台湾特有の果物「蓮霧」。一見洋梨のようだが、シャリシャリしたリンゴのような食感で、みずみずしく淡泊な味。左／湖を望む見晴らし台で、割いた竹の節を削る藤森さん。

四月二十六日（月）

現場1日目 日中／曇り 夜／小雨

午前／曇り

成田から台北へ

この日、成田空港に集合したのは、藤森さん、この茶室プロジェクトのコーディネーターを務めるアジアン・カルチュラル・カウンシル (Asian Cultural Council ACC) 日本代表でアメリカ人のジョージ・コーチさん、東大の藤森研究室の卒業生で今回通訳を引き受けてくれた台湾人の白佐立さんと、写真家・ライター・編集者の取材スタッフの計6名。

ACCとはアメリカとアジア諸国の文化交流を支援する財団。ニューヨークを本拠に、東京、香港、台湾に事務局を構え、個人や企業からの寄付をおもな財源として、これまで数多くのアーティストの活動を支援してきた。

今回のプロジェクトはACCが全面バックアップしているわけではないが、ACC台湾代表でキュレーターとして活躍中の張元茜さん（通称リタさん）と、コーチさんのふたりがパイプ役となって実現にこぎつけたため、できる限り協力しているようだ。ACCの主要メンバーにはお茶好きな人が多く、ふたり以外にもこのプロジェク

トになんらかの形でかかわっている人が複数いるという。

飛行機は雨季を迎えた台湾の厚い雲を突き抜け、昼すぎに台北に降り立った。気温はさほど高くはなく、雨も降っていない。空港から車で約1時間、現場近くにある民宿に向かう車中、さっそく藤森さんに話を



なぜか炭火のそばが定位置の1匹。

聞いた。

現地の湖と、竹の茶室が建つ湖岸の一部の敷地を所有するのは、范さんという客家（*）の家。仲間意識が強い客家は集まって住む傾向にあり、范さん一族も客家が多く住む北中部、新竹縣の一角に住んでいる。台湾の日本統治時代に財をなし、地元的地

敷地は新竹縣の奥まった山中。
湖は川を堰き止めてつくった人工湖。
一帯には手つかずの自然が残っている。

*客家（ハッカ） 中国華北の黄河流域に住んでいた漢民族であるという。中原を追われて広東省、江南省、福建省に至る。インターナショナルに活動する人材が多く、中国国民党の孫文、中国共産党の鄧小平、シンガポールの人民行動党を結成した李光耀など。ちなみに福建山間部に見られる円形または四角形の集合住宅も客家の土楼である。

主となった一族ゆえに、総じて親日家らしい。

敷地は 族が住む一帯からさらに奥まった山中にあり、湖は川を堰き止めてつくった人工の貯水池。警察の手が入りにくい立地から、かつては賭博場と売春宿があっただけという秘境。現在土地を所有しているのは歯科医を営む范揚橋さんだが、もとは范さんの父上が地元の開発を恐れて購入したとのこと。

藤森さん設計の建築現場といえば、施工会社が引き受けたがらない作業を素人の建築好きが趣味で行う「縄文建築団」が活躍することで知られているが、台湾のこの茶室の現場も、大半は素人が施工している。

台湾版縄文建築団の中心メンバーは、土地の所有者である范さんの弟の范揚存さん。スペインでジュエリーデザインを学んだ経験をもつ若きアーティストで、楽器をつかったり、最近では同じくアーティストである妻とコンセプチュアル・アートの立体作品などもつくっている人物。電動工具などの道具類を 式もっているうえ、非常に飲み込みが早い。彼が言葉は通じなくとも藤森さんの思いを即座に理解できる勘とセンスをもちあわせていたことが、今回のプロジェクトを実現に 歩近づけた大きな要因

のようだ。

藤森さんによれば、これまで台湾に「茶室」という、お茶を飲むための独立した建物がつくられたことはないとのこと。台湾茶ブームのなかで、画期的なプロジェクトであることはまちがいないだろう。周辺状況がだいたいつかめたところで、

「それで今回のふたつの茶室のコンセプトは？」と藤森さんに水を向けると、「あのさあ、そういうのは実物を見てから聞いたほうがいいんじゃないの？」と、さっそく 本とられてしまった。そうでなくても、コンセプト嫌いの藤森さんがいきなり聞いて教えてくれるわけがない。まもなく車は民宿に到着。荷物を置き、すぐ現地に赴くことになった。

午後／曇り

さっそく現場へ

民宿からさらに車で20〜30分、みかん畑と茶畑が続く傾斜地のあいだを縫うように高低差とカーブが激しい道が続く。最後は車1台がやっと通れる幅で未舗装、藪の中の道なき道を通り、ようやく目的地に着いた。民宿もそうだったが、やたら飼いが多く、范さんファミリーとともににぎやか

Fujimori Terunobu in Taiwan



中／屋根はまだ骨組みがむき出し。右端はコーナさん。



舟というより
湖に小島をつくりたかった。
建築としてつくりたかった。

写真上右／さっそく取材開始。右から2番目の鷹職ズボン姿は通訳の白さん。上左／施工中の舟の茶室。本体は、スタイロフォームにステンレスメッシュと、セメント系下地材（エキセル

ジョイント）を混ぜたモルタルを塗り込めたモノコック構造。下右／手曲げた銅板屋根材の束。下左／銅板屋根の張り方を実演する藤森さん。





Fujimori Terunobu in Taiwan



写真上／もうひとつの茶室を支える竹の柱のクローズアップ。竹は直径20cm以上もある「巨竹」という地元の竹。左／支柱の基礎部分。5本の柱が横1列に並ぶ。下／支柱を見上げたところ。微妙に曲がった5本が「入」と「川」に見えるため、茶室は「入川亭」と命名。





写真上／支柱の上端。この上に茶室がのる予定。透け透けの足場越しに湖が見下ろせる。下／竹は後で虫がわかぬよう、火であぶって油抜きをするが、「ちょっとやりすぎて焦げちゃったんだよ」と苦笑する藤森さん。巨竹は淡泊であり油分が出なかったようだ。

一直線に並べれば、
湖からだと
1本に見えると
思いついたんだよ。

4/26

Monday



に出迎えてくれる。

眼前に広がる湖は想像以上に大きく、蒼蒼とした湖面にまわりの緑や遠方の山々が映り込んださまは、まさに水墨画のようだ。湖岸にはかつての売春宿とおぼしき朽ちた煉瓦造りの建物が並んでおり、内部は厨房や控え室、資材置き場として活用されている。

范さん兄弟はふたりとも口数の少ない、とても控えめな感じの人。兄の揚橋さんは確かに歯科医らしい学者肌に見えるが、かたや弟の揚存さんは長い髪を自作のかんざしで束ねた、いかにもアーティスト然とした印象だ。

われわれが范さん兄弟やその家族、一家と付き合いのある建設業者やボランティアの人々など、三々五々集まってきた台湾版縄文建築団のメンバーと挨拶を交わしているあいだに、藤森さんはさっさと着替えて、すっかり板についた作業着姿に。ひと足先に着いて着替えずみの通訳の白さんもなんと鷹職人御用達の例のどぶだぶズボン。本家、縄文建築団の南伸坊さんのいでたちに憧れて購入したとか。気がつけば、コーチさんもはや現場モードに入っている。

何はともあれ、ふたつの施工現場の進行状況をのぞいてみよう。まず舟の茶室はと見ると、屋形船のような木造船を想像していたが、意外にも本体は、スタイロフォームにステンレスメッシュとセメント系下地剤を混ぜたモルタルを塗り込めた、モノコック構造。小舟のわりに存在感がある。なぜ木にしなかったのかと藤森さんに問うと、「舟というよりは小島をつくりたかった。」

建築としてつくりたかったんだよ」とひと言。意外とやすやすと設計コンセプトを語ってくれるんですねと茶化すと、「だから、こういうのは実物見てからじゃないとわか



1坪当たり約2人、
普通の10倍ぐらいの
人が働いている。
こんな現場、ほかにないでしょ。

写真右/垂木材に防虫 防
腐剤(キシラデコール)を
塗っているところ。中/小
さな茶室を大勢が囲む現場
は、大人の工作教室のよう
だ。左/屋根張り現場のそばで、
ロール状の銅板に折りじわ
をつける作業が始まった。

Fujimori Terunobu in Taiwan

らないでしょ」と照れ笑い。教授の講義は青空教室のほうに向いているようだ。

舟のそばには進水のための斜路が湖に向かって掘られている。舟の重量は約500kgで、進水式は5月末とのこと。ちゃんと浮かぶのかと聞くと、一応、図面を造船の専門家にチェックしてもらったが、コンピュータで計算したわけではないし、「浮力もつかないうちに軸先から水が入る可能性もあるんだよね」とのお答え。大丈夫なのか? だいたい屋根はまだ骨組みだけしかできておらず、進水式に間に合うのかさえあやしい。

藤森さんは屋根の銅板張りの見本を建築団の前で実演。込み入った解説は白さんの通訳が不可欠だが、言葉は通じずとも大まかなことは案外通じているようで、エアタッカーなど、藤森語の「プシュプシュ」で通っている。

方、竹の茶室のほうは、まだ支柱の竹と本体の茶室が合体しておらず、支柱の足元に置かれた茶室は外壁も屋根も下地材がむき出し。むろん内装も手つかずだ。明後日に茶室をクレーンで吊り上げ、竹の柱の上にのせるそうだが、その前に少なくとも屋根は葺き終わっていないとまずいらしい。6月初旬には竣工式典もあるというが、本当に間に合うのか?

しかし、当の藤森さんはあわてず騒がず、今度は竹の支柱のチェックへ。支柱はてっきり茶室の四隅を支えるのかと思いきや、5本が1列に並んでいる。微妙に曲がった5本の竹を正面から見ると「入」と「川」の字に見えることから、建築団のみんながこの茶室を「入川亭(Li sen tei)」と名づけたという。

使用しているのは台湾特有の「巨竹」という竹で、各直径は20〜25cmほど。かぐや

姫が入るとは藤森さんの弁。普通の竹は京都と数寄屋のにおいがするので嫌いだが、これなら使えると思ったそうだ。

ただし、問題は並べ方で、それぞれがほぼまっすぐだから、見る角度によって重なる2本に見えたり3本に見えたり、妙な遠近感が出て、すっきりしない。「千住の名物、お化け煙突だな」と写真の藤森さん。藤森さんいわく、「そうそう、それで直線に並べれば、湖から見ると1本に見えるところ、思いついたんだよ。これを思いつくまではけっこう大変だった」。なるほど、それで横1列というわけか。

コンクリートで足元を固めた柱の上部の揺れ具合や接合部分の仕上がりを点検すべく、藤森さんは透け透けの足場をどんどん上っていくが、高いところが苦手なこちらは後れをとるばかり。なんとか頂上にはたどり着いたが、到底、湖の眺めを楽しむ余裕はなかった。

それにしても、「高過庵」をはじめ、なぜわざわざ高いところに茶室をつくるのか。下界から離れるほど別天地をつくりやすいというのはあるだろうが、藤森さんいわく、「なんでだろうねえ、とんがったものの上が好きなんだよ」。著書「藤森照信建築」(TOTO出版)のなかで赤瀬川原平さんが、小学校入学時に初めて教室に入った生徒たち先生が「好きなところに座りなさい」と言ったところ、テルボ少年(藤森さん)は座席ではなく、段高い窓の敷居に座ったという逸話を披露していたのを思い出す。ともかく見晴らしのよいってっぺん好きなDNAの持ち主なのだろう。

さて、地上に降りた藤森さんは即、茶室の屋根づくりに取りかかる。下地板の上に防虫・防腐塗料を塗った垂木を打ち付け、その上に一枚一枚手作業で波板状に折り曲

げた銅板を重ね張りしていくのだが、わざと等間隔にしない垂木の留め方といい、1枚として同じものがない銅板の表情といい、いかにもツルピカ嫌いで毛深い仕上げを追求する藤森さんらしい。「きれいにならないように、テキトーにやるのがけっこう難しい」そうだ。

また、「つくりながら考える」のも藤森流。手を動かして試行錯誤しながら、その場にある材料や状況に応じて、臨機応変に形や仕上げを考えていく。海外のイベント向けに茶室をつくる場合など、図面どおりに事を進めねばならず、とてもやりにくいとこはす。

最初はどうかと思うことが、眺めているうちに録画の早送りのように作業はみるみる進行していく。舟の銅板張りもだいぶ進んだようだ。「1坪当たり約2人、普通の10倍ぐらいの人が働いている。こんな現場、ほかにないでしょ」。だから、クレールン車が来るまでには十分間に合うと、藤森さんは余裕の表情。

夕方／曇り

キーパーソン、リタさん登場

夕方、このプロジェクトのキーパーソンであるリタさんが現場に到着したので、話を聞いた。コーチさんによれば、大きな美術展のキュレーターとして活躍する一方、さまざまな人々のネットワークをつくり出し、それを束ねるカリスマ性をもった人で、ACCのなかでもリタさんが代表を務める台湾支部はとくにユニークな活動が繰り返られているという。

開口一番、リタさんはこう語った。



写真右／銅板を下から重ね張りしていく。隙間がないと毛細管現象で雨水が逆戻りするため、このぐらいのアバウトさがいいという。左／ひたすら山折り谷折りを繰り返して折り返しをつける、気の長い作業が続く。



4/26

Monday

「このプロジェクトは複雑な条件が絡みあって成立したもので、何か目に見えない力が働いている気がします。みなさんがここまで来てくださったのも、そうした力のおかげではないでしょうか。今日の作業を見てお気づきでしょうか、大切なのは結果ではなく、プロセスを通じ、参加する一人ひとりがいろいろなことを考えることなんです。だから、完成後の茶室を取材するより、つくっている段階を見たほうが100倍意味があると私は思います」

リタさんが最初に藤森さんの仕事に興味をもったのは、意外にも路上観察の活動だったという。2007年、前年にヴェネチア・ビエンナーレ建築展で開かれた藤森建築と路上観察をテーマにした展示の帰国展が、東京オペラシティアートギャラリーで開催された。この展示に興味をもちながら行けなかったACC台湾のメンバーである馬麗英さん（通称ティナさん）が、コーチさんに頼んで日本からパンフレットを送ってもらったところ、とてもおもしろいのですぐリタさんに見せたそうだ。「環境に負担をかける大きな建築物をつくるのではなく、自然にうまくなじむ小さな建物を多くつくっているし、人が見過ごしがちな路上のなにげない地域住民の知恵に注目するといった、もの見方も、自分に似通った部分があると感じました」とリタさん。

なんとか藤森さんと接触したいと考えたリタさんは、コーチさんを通じて働きかけ、台北で講演会を開いてもらったのを皮切りに、徐々に親交を深め、ACC内のお茶を楽しむグループのメンバーと来日し、藤森さん作の「高過庵」や「矩庵」(02)も見学。ぜひ台湾にもみな活用できる共有の茶室をつくりたいと、場を提供してくれる協力

者を探し、2009年夏には藤森さんと一緒に5つの候補地を見てまわったというから、さすが人脈と行動力の人だ。リタさんは藤森流茶室の印象をこう振り返る。

「台湾にはお茶を楽しむ空間といえば、大勢が集まれる広いスペースしかないのですが、まずあの制限された小ささに驚きました。その一方で、これまで体験したことのある日本の伝統的な茶室空間とは違った、新しい感覚、伝統を意識しない自由さも感じましたね」

コーチさんの補足によると、5つの候補地を視察した藤森さんはまもなく、そのうちの4カ所に建つことを想定した4つの茶室のスケッチを送ってきてくれたそうだ。メンバー一同、これにはずいぶん感激したらしい。湖に浮かぶ茶室はもともと現在の敷地につくられる予定だったが、竹の茶室のほうは別の場所に建てられる計画だったという。が、地盤が悪く、道路に面しているて不用心といった悪条件から建設不可能とわかり、范さんの土地にふたつ同時につくろうということになったそうだ。

気がつけば、もはや日暮れどき。作業を終えた人々が、料理が並んだ厨房前の食卓のまわりに集まってくる。昼食と夕食の用意をしてくれるのも、范さんの家族や知り合いのボランティアの人々。客家の家庭料理は薄味でヘルシー、どれもおいしく食べられた。

宿に戻っても、部屋にはテレビも電話も時計もなく、シャワーを浴びて寝る以外、することもがない。携帯電話もメールアドレスももない藤森さんですら「台湾に来るとストレスが減る」と言っていたのもわかるなと思いつつ、夜10時前には眠りについた。

四月二十七日（火）

現場2日目 午前／雨 午後／雨のち晴れ 夜／満月

竹の茶室「入川亭」がのる
高さ7mの工事も
素人の仕事だ。

「入川亭」は5本の竹で支える。
すべての竹の高さが
均等で水平になるように
仕上げなければならない。

全面写真／湖上から見た現場。高所で茶室を支える台座部分を補強する作業中。背景の森の植物がいかにも熱帯らしい。下右／竹の支柱上端の切り口。白く見えるのは節の部分。左／高所のスリリングな足場上での作業が延々と続く。



4/27

Tuesday

Fujimori Terunobu in Taiwan



入川亭から
飛び出した炉を
つくる作業行程
一部始終



Process 1 竹の上へのせる茶室内部。左の小さな穴から飛び出した形で炉を設ける予定。



Process 2 炉は舟と同じモルタルの左官仕上げ。まず市販のざると金網で骨格をつくる。



Process 3 金網をほどいた針金を使って、ざると金網を縫い合わせる。なんともアナログ。



Process 4 メッシュの上に、モルタルとセメント系下地材を混ぜあわせたものを塗っていく。



Process 5 壁から亀の頭が突き出したような、どことなくほけた味わいの炉の出来上がり。

明日は クレーン車が やってくる

雨のち晴れ、夜満月

朝方、民宿で飼う鶏の声で、2度目は屋根に叩きつけられる雨音で目が覚めた。外に出ると雨足はさほど強くなく、トタン屋根のせいかと気づく。が、朝食の頃には本降り。今日は雨のなかの作業になることを覚悟しつつ、7時半すぎに車で出発した。なにしろ明日はクレーン車が来るのだから、竹の茶室の屋根が完成してスタンバイできていなければ話にならない。銅板を波板状に加工する作業スペースが雨で濡れぬよう、この日の作業はまずテント張りから現場で使用しているアメリカ製の緑色のタープは見かけはヤワそうだが、藤森さんによれば、ヘビィデューティで優秀だそうだ。作業場が確保できたところで、なんともアナログな銅板曲げと張りの作業が始まった。舟の屋根に張る銅板も、片はもっと小さいが手法は同じで、すでに加工済みの多数の銅板を見かけた。板チヨコの包み紙のように折りじわがついた板をどうやって加工したのかと思っていたが、手作業で山折



雨の現場。奥に竹の支柱の上部が見える。

ちさんはしきりに気にしているが、「上目遣いに見るんだから全然平気だよ」と藤森さん。それも味のうちと言わんばかりだ。垂木が屋根からはみ出した裾の部分が行の邪魔になって危ないと、弟の范さんの妻で、夫と同じくアーティストである俞瑞玲さん（通称レベッカさん）が突如、つひとつに使い古しの軍手を被せはじめ。茶室が突然、手がたくさん生えた唐傘お化

り谷折りを繰り返す単調な作業だ。見ていると、建築団の地道な努力に頭が下がる。途中でロールの銅板が足りなくなり、買い出しに行ったりして少々タイムロスしたが、屋根は着々と出来上がっていく。コーチさんも腕をふるっており、藤森さんの信頼も厚いようだ。湖から見える側の屋根を先に張ったら仕上がりが今ひとつだとコー

けみたいになって、みんな大笑い。「現代美術は楽でいいなあ」と藤森さん。なごやかで、つくっているものも小さい現場は、建設現場というよりは、夏休みの宿題の工作を子どもそっちのけでつくっている大人の集団のように見える。屋根葺きを建築団のメンバーに任せ、藤森さんは茶室内に入って思案している様子。外壁や内装は高所でもできるが、上にのせてから左官工事をするのは大変なので、炉は今つくってしまおうと考えたらしい。

内部は藤森さんの茶室では最小の2畳だそうだが、炉はどこに切るのかと思ったら、壁にいた穴から飛び出させた形で据え付けるようだ。つくり方は写真説明に譲るが、あつというまに壁から突き出した亀の頭みたいな炉が完成した。茶室の準備が整ったところで、重さを量ってみようと藤森さんが言い出した。どうやって量るのかと思ったら、家庭用の体重計を取り出し、まず湖側の2隅を持ち上げて体重計の上のせて計測、次に逆側の2隅をのせて計測し、4つの数字を合計すれば総重量が出ること。数学や理科に弱い人間にはなぜそうなるのか、まるでわからないが、測定の結果、重さは約353kg

と判明。小さめの御輿ぐらいだろうか。藤森さんには十分、想定内の数字だったようで、よしよしと今度は茶室を支える土台の補強に取りかかるべく、足場を上っていく。午後には雨も上がり、晴れ間がのぞいてきた。高所取材は遠慮して、あいまを縫って建築団の面々に話を聞く。藤森さんの評判はすこぶるよく、やさしく、頭がよく、偉い先生なのにいばっていないと全員口々にほめる。ただ、弟の揚存さんだけが「面と向かってはともいえないけど、先生は来るとすぐ着替えて、気に作業を始め、休憩も食事も早いので、全然休めなくて少し困ってます」と本音を言ったのがおかしかった。

揚存さんはこうも語る。「普通の建築家のように図面どおりつくるのではなく、イメージは頭の中にあつて、しかも、つくりながらどんどん変わっていく。それが楽しくもあり、大変でもあります」。藤森さんがいないと作業が停滞し、東京に連絡をとろうにも何人も人を介すと意思の疎通がうまく図れず、もどかしい思いをしたこともあつたようだ。それでも、今回の貴重な体験が、「今後、自分自身の変化に影響を及ぼすでしょう」と笑顔でしめくくってくれた。夕刻、竹の茶室は本体、土台ともに準備万端整い、この日の作業はめでたく終了。空には月も出て、明日はクレーン吊り上げにもつてこいの日和になりそうだ。

Fujimori Terunobu in Taiwan



写真右／作業の息抜きに、塩ビ管のいかだボートで湖に漕ぎ出すコーナさん。波がほとんどないため、ひとりでも軽々進むそうだ。右上／湖のほとりに立ち並ぶ、もと売春宿とおぼしき古い建物をリフォームし、キッチンや休憩所、資材置き場として活用。左上／資材置き場から竹の茶室内部に張る合板を運び出す藤森さん。

湖へ手づくりボートで漕ぎ出すとただ自然のなか。



写真上 上／支柱上部の台座部分を見上げたところ。三角形の部分を加えて、荷重がかかっても丈夫な構造に。上 下／銅板屋根もだいぶ張り上がってきた。均質さを避けた、垂木のまばらな感じがいかにも藤森流。右／雨のなか、タープの下では范さん一族総出で作業中。レベッカさんが垂木の末端に危険防止用にはめた軍手が、ユーモラス。現代美術のようでもある。



4/27

Tuesday

四月二十八日（水）

現場3日目 朝／雨 午後／土砂降りのち晴れ 夜／月夜

朝／雨

藤森茶室論

ところが、翌日の早朝は晴れていたのに、朝食前からポツポツと雨が降り出した。たとえ晴れていても、雨上がりで道がぬかるんでいると、車が立ち往生する危険があるので、クレーン車は出せないと業者が渋っているの聞いたが、これでは無理かもしれない。

それはともかく、朝食前の貴重な時間に藤森さんをつかまえておかないと、現場ではとても話を聞く余裕がないので、茶室について少し語ってもらうことにした。

もともとお茶を飲むのは好きだが、もちろん流派やしきたりにはまったく興味なかったと言う藤森さん。茶室に関心が湧いたのは、縁あってほぼ同時につくることになった「夜亭」03/40ページ写真16・17（参照）と「矩庵」03以来だという。

「まず、スケールが特殊で、そこがおもしろいことに気づいた。今まで茶室をつくってきた人はインテリアのことだけ考えていて、外から見るというのはありえなかったと思うけど、僕がつくった茶室は窓を大きく取ったから、外から建築と人を一緒に撮影できたんだよ。そしたら、人が大きくなってなんともコミカルで、まるで大の大人がお遊戯室で大まじめに儀礼をやっているみたい

に見えて、大笑いした」

狭さを感じさせない工夫を学び、変化ある充実した空間をつくるためには、まだまだ考えることがあると感じたという。

もうひとつ、藤森さんが茶室において注目したのは、「火」がある点。利休がたつた1・8m四方のスペースの畳の隅を切ったまで炬を設けたのはなぜなのか。縄文住居以来、火のまわりに生活の場があったわけ、そこには住まいの原形がある。つまり、利休は茶室に建築の基本単位を求めていたんじゃないかと気づいた。火を入れなげや、人間のための空間にはならないんだよ」と藤森さんは語る。

原広司さんが昔、「ピラミッドを見ると圧倒されるが、日本には茶室があると思うと踏みとどまれる。最後にうっちゃりをかけてやる、こっちは1坪だぞ、と思うんだ」と言っていたそうだ。たつた2畳でつくれる神聖なる空間、茶室。狭さを心地よさに変え、数時間を気持ちよく過ごせる空間づくりを、これからも藤森さんは目指しているのだろう。

午後／土砂降りのち晴れ、月夜

クレーン車は

来なかつた……

話を聞いているうちに雨はどんどん強く

Fujimori Terunobu in Taiwan

茶室の天井、壁の上部、床に張る竹の油抜き。外壁用焼杉の実演。

なり、日本ならとうに大雨洪水警報が発令されていそうなほどに。しかも、1時間以上も続いている。これでは今日のクレーン吊り上げ作業はあきらめるしかない。

この日の現場は中断していた舟の茶室の屋根張りを続行する一方、雨のタープ下でもできる内職を進めておくことになった。

内職とは、竹の油抜き。藤森さんは茶室の床に竹を張るつもりだという。といって、桂離宮の月見台のすのこのように、まっすぐ伸びた竹をそのまま並べる手法はいやだからと、わざわざ縦に割いて、隙間をあけて不均質さを強調するように張り、あいを漆喰で埋めるらしい。竹は乾燥させた後、1本1本熱して油を抜き、節に産みつけられている虫の卵を殺しておかないと、後で虫が食ってとんでもないことになるという。油抜き（左ページ左上の写真参照）は根気さえあれば誰にでもできる作業。われわれも、見よう見まねで手伝うはめに。

この日も気づけば、あんなに降っていた雨は上がっている。そこで、藤森さんが始めたのは、竹の茶室の天井と壁の上部の仕上げの見本づくり。竹を割いた小片をバーナーで焼いて炭状にしたものを、隙間をあけながらポーター状に並べ、そのあいを漆喰で埋めて縞模様にする予定だという。揚存さん夫妻も興味津々で見学している。

そういえば、外壁はお得意の焼杉仕上げにするから、後で時間があつたら実演して

見せてもいいという話だった。藤森さんに聞くと、焼杉はもう飽きたと閉口しつつも、「十分乾いてないとうまく火がつかないかもしれないけど、まあやるだけやってみよう」と、杉板を運び出すよう指示を出し、入り口近くの空き地に向かった。作業の手順は左ページ右上2点の写真をご参照いただきたいが、なんとも原始的。ものの数分で焼き上がり、墨色のざらざらした表面が表れた。これどころな茶室はどんな表情を見せるのだろうか。

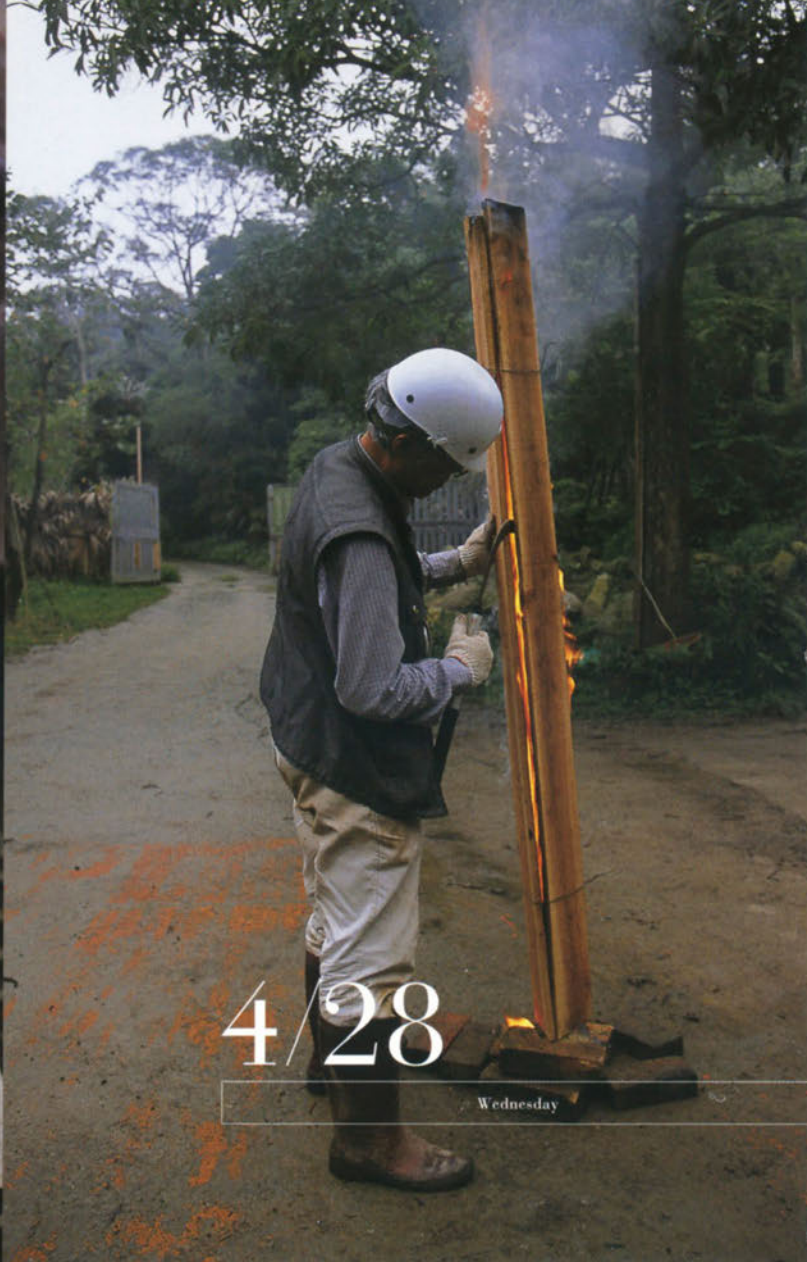
日が暮れ、今日はこれでお開きかと思つたら、屋形の銅板張りが完成した舟のあたりで藤森さんと揚存さん夫妻が何か始めた。内部をライトアップするらしい。

あかりが灯ると、銅板の隙間から光が漏れ、屋形全体が赤くなり、闇のなかに幻想的な風景が浮かび上がった。見ていた建築団から歓声が起こる。隙間から炎が出ているようで、「溶鉱炉みたいだなあ」と藤森さんも満悦。

空にはまた月が出ています。明日は出発までにクレーン吊りが完了するだろうか。



間夜に赤く浮かび上がる舟の茶室。



4/28

Wednesday

利休は茶室に
建築の基本単位を
求めていたんじゃないかと
気づいた。火を入れなきゃ、
人間のための空間には
ならないんだよ。

写真上／茶室の内装に用いる予定の、細かく割いた竹を油抜きする工程。端から炭火でじんわり熱し、少しずつ位置をずらしながら、表面に浮き出た油を拭き取っていく。後で虫が入るのを防ぐ大切な作業だという。下／昼食と夕食には范さん一家やボランティアの女性たちがつくった料理が並ぶ。客家の家庭料理はどれもやさしい味がした。



写真上／竹の茶室の外壁に張る予定の焼杉のつくり方を、藤森さんが特別実演。3枚の板を煙突状になるように針金で縛り、下から火を入れると、煙突効果でみるみる火が上っていく。左／数分後、針金をほどくと、みごとに焼き上がった黒色の表面が現れた。下／この日、現場の一角に登場した台湾式即席神棚で、明日の晴天を祈願する藤森さん。



四月二十九日（木）

現場 4 日目 快晴

午前 / 快晴

クレーン車が やってきた！

みな祈りが通じたか、翌日は快晴になった。

予定どおり夕方の飛行機にのるには、遅くとも午後3時には空港に着かねばならないが、現場に乗り入れる車は台数も限られており、あらかじめ全員の荷物を運んでおくのは難しい。相談の結果、ぎりぎりまで粘りたい藤森さん、通訳の白さん、写真の藤塚さんは午後2時に現場から空港へ直行し、それ以外の取材班は民宿で荷物を引き取る時間を考えて、午後1時半に現場を去ることに決めた。

はやる気持ちを抑えつつ、現場へ向かう車中、「着いたらもうクレーン車が来てたりしたら、うれしいのねえ」とつぶやく藤森さん。8時頃到着すると、范さん一族はまだらしく、入り口の門は閉まっている。車を降りて待っているあいだも、藤森さんは何やらディテールを考えているようで、しばらく敷のなかに消えたと思ったら、若い竹を3本採集して戻ってきた。何に使うつもりだろうか？

ほどなく揚存さん夫妻の車が到着し、開門。現場で唯一の携帯電話の持ち主である

妻のレベッカさんとリタさんが、クレーン車の派遣を予約していた業者とすぐ交渉を始めたが、やはりまだ道がぬかるんでいるので、今日は無理だと断られたという。

建築団や取材スタッフの顔に落胆の色が浮かぶ。藤森さんなど、今日の遠足は中止と言われた子どもみたいに、見るからにしょんぼりしている。しかし、さすが冷静かつ行動力のある司令塔のリタさんは、別の工事業者に掛けあうと言い出した。依頼した当日にこんな山中に来てくれる業者が見つかるかどうかはわからないが、このチャンス逃しては、これから本格的な雨季を迎える現場にクレーン車が来られる日など、当分ないかもしれない。交渉はリタさんたち任せ、建築団はとりあえず竹の茶室の上のタープをはずし、まわりを片づけ、宙吊りのための準備に取りかかった。

一方、藤森さんは寸暇を惜しんで、先ほど採集した竹の油抜きを始めた。取材班も手伝いながら、これで何をつくるのかと問うと、舟の屋根の入り口部分に張ってある銅板のエッジで、出入りする人が怪我をする危険があるので、竹を丸く曲げてガードにするという。

そうこうしているうちに、レベッカさんから朗報が届いた。掛けあったほかの業者が引き受けてくれ、クレーン車が11時頃には到着するというのだ。ただ、時間どおりに来るのかと危ぶんでいたら、やはり11時

最終日は スケジュールに追われて 全員懸命に作業を進める。



写真右/下地の合板を張り終えた竹の上の茶室内部。左に広さは2畳。はしこから入る正面の欄り口からクレーン/いとも簡単に茶室を吊り上げられた。

ち着け、油抜きした竹をさらにあぶっては曲げ、曲げ木ならぬ曲げ竹のアーチを製作。舟の屋根入り口のガードは無事完成した。レベッカさんから、クレーン車は湖の入り口にかかる橋を越え、時速10kmぐらいののろろ運転でこちらに向かっているらしいと実況中継があつてからほどなく、待ちに待ったクレーン車のエンジン音が聞こえてきた。もはや時刻は昼の12時前。われわれに残された時間はわずか1時間半。建築団は吊り上げ専用のベルトを引っかけるため、茶室の下に柱を差し渡す準備を開始。湖上から吊り上げ風景を撮影する藤塚さんは塩ビ管のいかだボートで湖に漕ぎ

出す。ずうっと和気藹々ムードだった現場が、このときばかりは緊張感に包まれた。一段高くなった土地に駐車したクレーン車から伸びたアームが、茶室にかけたベルトを引っかけ、茶室が水平に持ち上がりはじめると、藤森さんや揚存さん夫妻は足場の上に乗って、竹のてっぺんの台座に茶室がのるのを待ち構える。どこか足場の床に隙間があいていたらしく、「みんなが上向いて作業するとき足場がちゃんとしてないと危ないぞ！」と珍しく藤森さんの険しい声が飛んだ。事故を何よりも心配する藤森さんの気遣いだ。

微妙な位置を少しずつ調整しながら、ゆっくり降りていく茶室。1列に並んだ竹の上ののせるなんて、見るからに不安定そうだと心配していたが、茶室はあつけなく無事着地。と思つたら、藤森さんが、「あ、糊を忘れた！」と叫んだ。合体する直前に竹のてっぺんに接着剤を塗らねばならなかったらしい。やむなく茶室を再度持ち上げ、接着剤を塗り、再び降ろす。と、「危ない！」と声が。何が起こったのか、下からはよくわからなかったが、後で藤森さんに聞いた話では、土台の木枠の水平がやや狂つていて、接着剤を塗ったから、降ろした瞬間、ヌルッとすべつたらしい。不幸中の幸いで、湖側の2辺と反対側の2辺の傾きが逆方向だったため、なんとか茶室は落ちずにすみ、後で下から頑丈にビス留めしたので事なき

Fujimori Terunobu in Taiwan



写真上／森のなかにたたずむ舟の茶室は、進水の日を待っているようで愛らしい。下／内部から眺め越しに湖を望む。すのこをはずすと、スタイロフォームとモルタルのモノコック構造が出現。

4/29

Thursday

を得たようだ。

2度目の着地を見届けると、まわりじゅうから拍手が起った。時すでに午後1時半近く。取材班第1陣は挨拶をする暇もなく、車に飛び乗り、現場を後にした。

午後／快晴

コーチさんの結び

奇跡的に間に合っつてよかったが、まさかこんな秒読みになるとは。今頃定員3名の竹の茶室には誰が入っているんだろう。



空港に向かう車中、コーチさんが、よくここまでたどり着いたと感慨深げに語る。行動力と統率力でこのプロジェクトを実現に導いたリタさん、手先の器用さと勘のよさで藤森さんの片腕役をみごとこなした揚存さん、通訳と施工の双方を兼ねて作業を円滑に進めるのにひと役買ってくれた白さんなど、誰が欠けても、事はこううまくは運ばなかつたららうとコーチさんは言う。また、さまざまな流アーツととかかわってきた目利きでもあるコーチさんだけに、ふたつの茶室については、こう語ってくれた。

「竹の上の茶室と湖に浮かぶ茶室、このふたつは男と女、静と動、陰と陽など、さまざまな対比の意味をもつ空間で、お互いがどう作用しあうかというのも興味がありますね。台湾初というだけでなく、同時に同じ場所に藤森さんの茶室がふたつ誕生するというのも初めてのことですから。ハイブリッドのおもしろさがあると思います」

ふたつの茶室で楽しむお茶は、当然ながら日本の抹茶や煎茶ではなく、中国茶。現場で休憩時に淹れてもらったお茶はプーアル茶のような独特の香りのお茶、地元の名産である東方美人や、包種茶と呼ばれるお茶など、つひとつ、香りや色が大きく異なっていた。コーチさんによれば、味が重視する日本のお茶と比べ、中国茶は香りが重要な要素で、作法もフォーマルな日本の茶道に比べると堅苦しくなく、リラックスした雰囲気を楽しむものだという。しきりにとらわれず、サイズと蹴り口と炬さえ守れば、後は自由につくるといふ藤森流茶室は、中国茶の世界にはちょうどなじみがいいのかもしれない。

今回の取材を通じて感じたのは、リタさんが言うように、藤森さんの作品は完成形だけではなく、状況に応じて時々刻々変化していくプロセスを含めてひとつの作品であること、そして、小さな茶室程度の建築なら素人集団でもなんとかできてしまうし、大勢でひとつのものをつくり上げるおもしろさや充実感を味わう体験は、人間や社会を元気にするためにかけっこう重要ではないか、ということだ。

さらに付け加えるなら、物事が予定どおりに進まなからうと、「ま、いっか」と笑って許せるような、南国独特のゆるい台湾人気質もまた、藤森建築には似つかわしい気がした。



忘茶舟

写真上上/忘茶舟で、台湾茶のセレモニーを上演。上中/忘茶舟を漕ぐ范揚存さん(左)と妻のレベッカさん(右)。舟から上がる煙が見える。上下/斜路の緑は范揚存さんが自然になじむように植えたもの。下/湖の先に入川亭が見える。下左/本脚に見える入川亭と忘茶舟のツーショット

写真家再訪。

これが出来上がりだ。

「入川亭」「忘茶舟」

6月11日(金)〜13日(日)

竣工後現場 雨ときに大雨

戦い終わって 藤森照信 後日談

工事の山場を連日見学した以上、完成後はどうなったのかも気になるというもの。後日、完成写真を見ながら、藤森さんに後日談を聞いた。

「最後はなんとか徹夜せずにすんで、予定どおり竣工式典もできました。感想は、よくぞここまでやったという感じかな。今回は共同設計者がいなかったし、言葉や文化や天候の違いもあって、予想外に時間がかかったけどね」

それでも、巨竹を使った世界初の構築物と、モノコック構造によるコンクリート船を、ほぼ素人の手だけで作りあげた意義は大きいと藤森さんは語る。

不安定そうな竹の茶室は実際にはほとんど揺れず、スリリングな高所好きの藤森さんには物足りないほどのらしい。一方、舟の茶室もFRP製のボートのようにぐらぐらせず、シャンとしているようだ。

式典で集まった建築団のなかには感激して涙する人も多かったというから、きっと今頃は「祭りの後」の脱力感を味わっているにちがいない。

ほんと設計図を施工会社に渡せばできる、というわけにはいかない藤森さんの設計 施工システム。遠距離、異なる言語、国民性の違い、素人集団、雨季、などなど、さまざまな要因ゆえに、ひと月、ふた月……と遅れた竣工日が、ようやくやってきた。写真の藤塚さんに再訪してもらい、待ちに待った竣工写真を撮らせてもらった。



7mの竹の上は意外にも安定感あり

全面写真／入川亭へ上がる
はしごは折り畳み式で、上
部には竹のガードを設置。
銅板屋根はすでに変色して
いる。入川亭越しには湖
の全容が見える。上／天井
から壁にかけ、竹炭をボー
ダー状に張った。



入川亭

Tea Nest IRISENTEI

「入川亭」「忘茶舟」づくり 協力した台湾版 縄文建築団メンバー



張元茜
チン・インチン

通称リタ。台湾で多数の大規模展を企画するキュレーターであり、現在、ACC台湾代表も務める。今回のプロジェクトでも中心的役割を果たす。「藤森さんは手を動かすことの大切さを教えてくれた人。ここでは誰でもやれることが見つかるし、不器用でも参加すれば、藤森さんに「いいね」とほめてもらえますよ」。



徐寶玲
シュウ・パウリン

通称パウリン。ACC台湾のメンバーで、ティナさん同様、お茶や歌をこよなく愛す。今回唯一、渡米中で取材できなかったため、ポートレートも後日、藤森さんが撮ったスナップ。竣工式典では、藤森さんへの感謝を込め、湖のほとりでさだまさしの名曲「人生の贈り物」を日本語で熱唱。集まったメンバーは感涙したとか。



陳慧珍
チン・フエイゼン

范揚橋さんの妻。夫の歯科医院の助手をしている。「この土地は2年経たない建物が増えてられない農業用地で、どう活用するか、計画を練っていました。藤森先生の作品を見て、これなら環境と一体になるものがつくれると直感しましたね。今日初めて施工を手伝いましたが、私でもできることがありうれしかったです」。



俞瑞玲
イウ・ルメイ

レベッカさんの妹。ガン予防センターなどでボランティア活動をしている。現場ではおもに料理担当だが、手伝えることがあればなんでもやる。「藤森さんは国際的に有名な人なのに距離を感じさせない、素敵な人。ここはいろんなおもしろい人が集まって来るので、さまざまなことを学ぶことができます」。



葉日堯
イェ・ジイ・ヤウ

造園と建築全般の施工会社を経営。范揚橋さんとは古い付き合いで、ここでは舟の茶室の斜路や支柱の竹の基礎など、おもだった建築工事を担当。風貌と、困ったときに便利な道具を出してくれることから、愛称は「ドラえもんさん」。「藤森さんは尊敬できる人。アイデアやインスピレーションをたくさんもらいました」。



馬麗英
マ・リンイン

通称ティナ。リタさんとはお茶を愛するサークル仲間。オペラシティで開かれたヴェネチア ビエンナーレ婦国展のパンフレットを取り寄せて、藤森建築に一目惚れ。すぐリタさんに見せたことが、このプロジェクトの起点となった。「ビデオで幹藤森さんのファンです。ふたつの茶室がどう対話し、呼応するか楽しみです」。



ジョージ・コーチ
George Kochi

6月までACC日本代表。来日して18年。このプロジェクトでは日本と台湾をつなぐコーディネーター役。つねに藤森さんと同行し、現場では積極的に作業に参加。「日本に戻ってもしばらく、手や指に疲労の余韻が残っていて、それが心地いい。藤森先生は単にアートだけでなく、コミュニティをつくっているんだと思います」。



范揚存
ファン・ヤンクン

范揚橋さんの弟。もともとスペインでジュエリーデザインを学んだ経験をもつアーティスト。ここでは道具一式を提供する一方、持ち前の器用さで藤森さんの右腕として活躍中。「こんな大きなプロジェクトにかかわるのも、こんなに大勢の人々との共同作業も初めてで、いろいろな意味でよい経験になりました」。



范庭榕
ファン・ティンロン

もともと竹の茶室を建てる予定だった土地のオーナー。レベッカさんの友人でもあり、現在は食事の運搬係を担当。「自分の土地でなくとも台湾に茶室ができるので、さほど残念ではないです。誰の土地とか建物と意識せず、こうして協力しあう客家特有の仲間意識は、外の人にはなかなかわかりにくいかもしれませんね」。



劉徳丞
リウ・デーチン

葉さんの会社の若手社員で、この現場では葉さんの補佐役として働いている。「ここでは新しい仕事ができ、非常にいい経験になりました。藤森さんは偉い先生だけど決まっていばったところがなく、こちらと意見が食い違わうときもとても丁寧に説明してくれるので、現場のコミュニケーションはうまくいっています」。



楊世傑
ヤン・シーシェ

通称セルジオ。インテリアデザイナー。ACC台湾のメンバーで、リタさんとは古くからの友人。中国茶だけでなく、日本の茶の湯にも造詣が深く、陶芸をたしなんで自ら茶器も制作。「高過庵」や「矩庵」も視察した。「藤森さんは知的な侍、建築知識の生き字引。かつ現場では原始的で有機的な手作業を重んじる実践派です」。



范揚橋
ファン・ヤンキョウ

湖全体と茶室のある一帯の土地のオーナー。職業は歯科医。藤森さん来訪の折は仕事を休んでも現場に顔を出すという。「初めて藤森さんの作品集を見たとき、先生のスタイルはこの自然環境のなかで個性を主張しすぎず、とてもよくなじむと感じました。実物は想像をはるかに超えるもので、大変気に入っています」。



俞瑞玲
イウ・ルリン

通称レベッカ。范揚存さんの妻で、アーティスト。現在は夫妻でコンセプトチュアル アートを制作している。「ここはお茶の産地でもあるので、ぜひ先生に茶室をつくってもらいたいと毎日祈っていました(笑)。みんなで一緒につくると、汚れたり疲れたりすればするほど仲良くなり、それがパワーになります」。



梁台欣
リヤン・タイシン

レベッカさんの友人で、頼まれて料理担当に。范庭榕さんが車で運んでくる料理はおもに梁さんがつくったもの。「プロの料理人ではなく、まったくの趣味です。地元の農家と組んで有機野菜を推進するボランティア活動をしているので、ここでは地元の畑でつくったものを使用。現場のみなさんの健康に気を配っています」。



白佐立
ハク・サリツ

通訳を引き受けてくれた東大藤森研究室の卒業生。現在は東京のインテリアセンタースクールで講師を務める。藤森さんとの出会いは、自分が卒業した桃園県の中原大学で開かれた竹のワークショップ。「建築家のなかには口先だけで手が動かない人が大勢いますが、先生は何事もまず手を動かすところが魅力的です」。

藤森建築に不可欠なのが、素人からなる施工集団「縄文建築団」。工務店にお願いできない部分の仕事を買っているが、ここでは施工の大半をオーナー 族やACCのメンバーなど、台湾版・縄文建築団が担当。メンバーの面々にプロジェクトの感想と藤森さんの印象を聞いた。

俞瑞玲さん、通称レベッカさんの妹の夫。現在の職業はウェブプログラマー。范一族の記録係として、工事の経過をカメラに収めている。「これまで芸術は生活とはかけ離れたものと思っていたけれど、藤森さんの作品は生活に溶け込んだアートだと感じます。ネットで彼の経歴を調べ、会うのを楽しみにしていました」。

インドネシアから4月に来たばかりで、范揚橋さんの歯科医院でヘルパーとして働いている。「ここは私の故郷に似ています。インドネシアには、こういう場所はまだまだたくさんありますよ。そこのお皿に載っているのは私がつくったトウモロコシの天ぷらで、シンガポールの料理です。ぜひ召し上がってください」。



簡道虔
チン・ダウチン



プルワティ
Purwati

Tea Nest IRISENTEI

入川亭

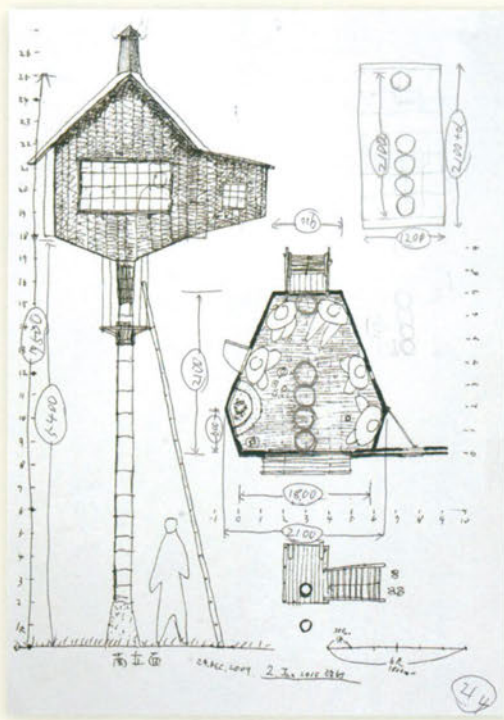
支柱は5本の巨竹。一列に並べて、湖側から見ると一本脚に見えるようにした。

建築概要

所在地	台湾新竹縣
主要用途	茶室
設計	藤森照信
施工	藤森照信+現地ボランティア
設計期間	2005年5月17日～ 2010年1月2日
施工期間	2009年12月18日～ 2010年6月6日

入川亭

延床面積	約3.6㎡
階数	地上1階
構造	竹+木造
●おもな外部仕上げ	
屋根	銅板葺き
外壁	焼松
●おもな内部仕上げ	
床	漆喰入りペンキ
壁	漆喰入りエキセルホワイト
天井	漆喰入りエキセルホワイト



*このスケッチは2009年12月のもの。最終的には床レベルまで地上7.2m、天井高3.3mの全高10.5mになった。

1/100

0 1 2m



忘茶舟

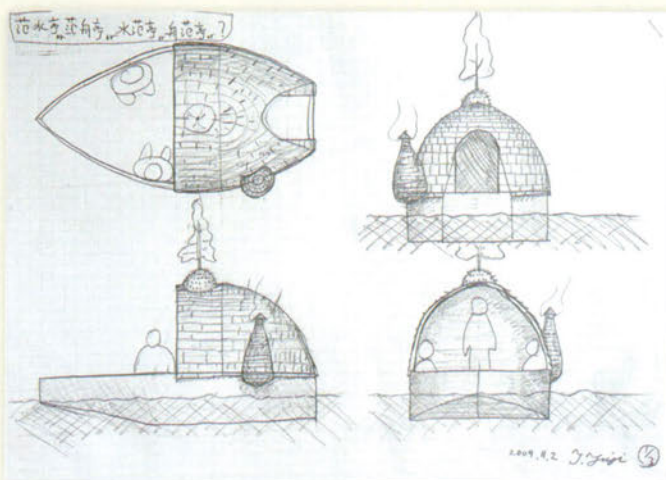
延床面積	約4.7㎡
階数	地上1階
構造	スタイロフォーム エキセルジョイント、モルタル・ ステンレス金網による モノコック構造
●おもな外部仕上げ	
屋根	銅板藤森葺き
外壁	構造体にFRP仕上げ
●おもな内部仕上げ	
床	合板に漆喰入りペンキ
壁	合板に漆喰入りペンキ
天井	屋根銅板、下地合板



Tea Boat BOHCHABUNE

忘茶舟

本体は木ではなくコンクリート船。小島のような「建築」にしたかったという。



1/100

0 1 2m

座談会 協同設計者が語る藤森建築

ポートレート写真／山内秀鬼
建築写真 スケッチ／藤森照信



夜中の

内田
Yoshida
祥士

藤森建築のほぼ100%に協同設計者が存在する。正しくは、協同で設計する形態の成立こそが、建築家・藤森照信を誕生させた、と言うべきかもしれない。とはいえ、藤森さん本人が目立ちすぎるので、彼らのことは十分には知られていない。何者なのか、藤森さんとういう関係なのか、協同する理由は何か、設計の役割分担や暗黙のルールはあるか、おもしろいウラ話はないか、など、聞きたいことがたくさんあったので、集まってもらった。古くから何度も藤森さんと組んでいる内田祥士さんと大嶋信道さんに、比較的最近かわるようになった川上恵一さんを加えて、3人の協同設計者の言葉を通して、藤森建築、藤森照信にもう一步踏み込む。

大嶋
信道
Ohshima Nobumichi



プロ
ア
タ
ス
で
始
ま
る

川上
恵一
Kawakami Kenichi

指導教官とつとの出会い

——お三方は藤森照信さん設計の建築に協同設計者としてかかわっていらっしやいますね。まず、藤森さんとの出会いから語っていただけますか。

内田 祥士 指導教官でした(笑)。指導教官が仕事を頼んでくるというのも不思議な……。規模が小さいから僕でいいと思っただけじゃないでしょうか。最初の「神長官守矢史料館(※1)」(以下「神長官」)です。

大嶋 信道 内田さんは藤森研究室のときに実測調査をされたそうですね。

内田 ああ、しました。

大嶋 私が聞いている話では、そのとき、みんな建築科の学生だから形は描けているけれど、内田さんのは実測のレベルが違っていたと。中の構造まで全部わかって描いて、それをまわりの学生に解説してくれていた。そういうところから技術者としての腕の確かさを、先生は見ていたんじゃないですか。

内田 藤森先生がそんなことを言っていたの。聞いてないなあ。

——うれしい話ですね。

内田 じゃあ、そういうことにして(笑)。僕は大学を出て5年、増沢洵さんの設計事務所に勤めて、その後、もうちょっと勉強したいと思って大学院に入ったんです。だからほかの学生よりは現場の経験はありましたね。20代末でした。

——それまではどんな仕事でしたか。

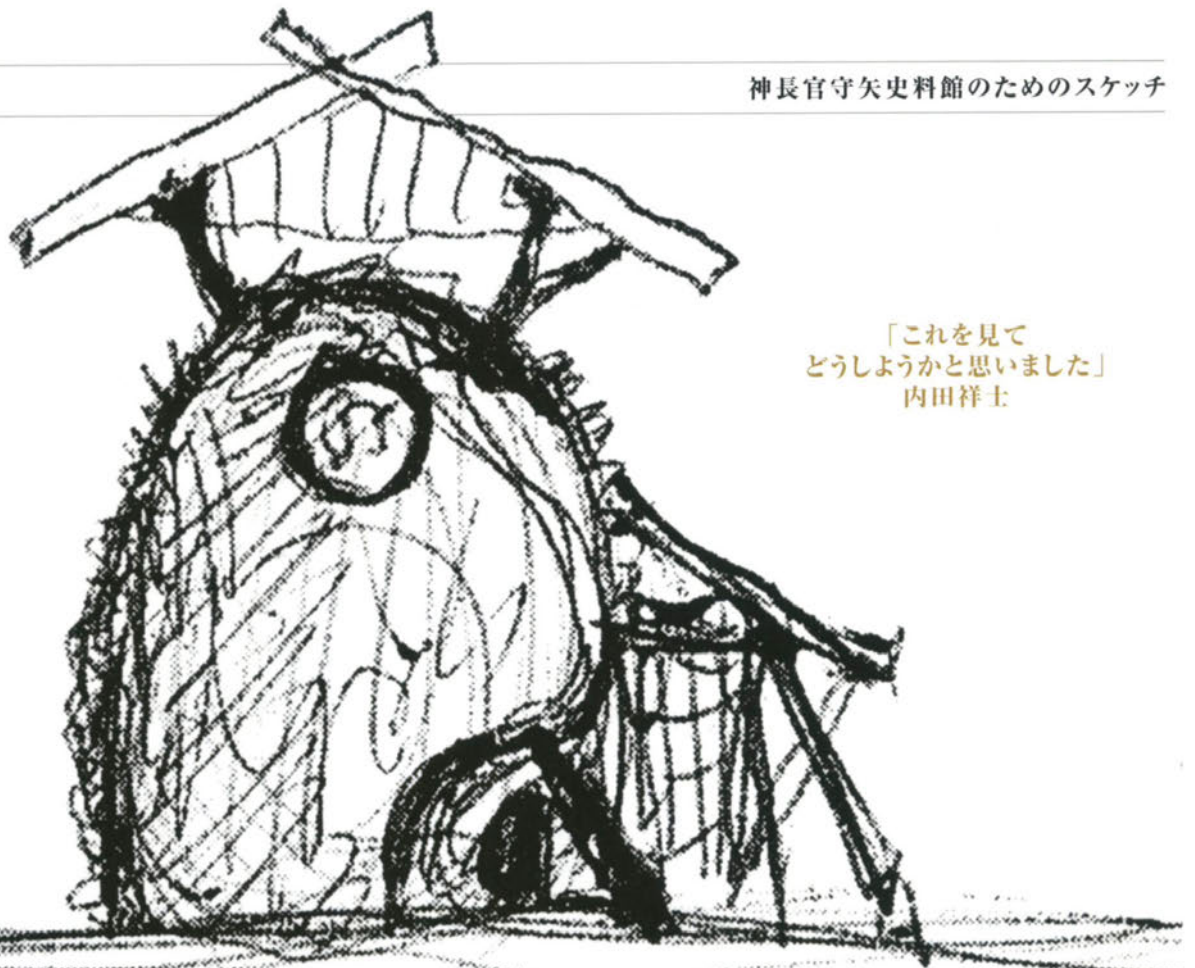
内田 住宅と公共建築でした。所内でひと通り教えていただいた後、現場に常駐するんですが、現場から帰ってくるいろいろなことがわかってくるんですね。

——藤森研に入ったときリノベーションをやりたいと言ったそうですね。

内田 建築を維持していくことを考えたいと思っていました。敗戦直後の廃墟から始まって、空いている土地に建物が建つ。それがやがて既存のものを壊して建て直す時代に

神長官守矢史料館のためのスケッチ

[スケッチ 1]



「これを見て
どうしようかと思いました」
内田祥士

Jinchokan Moriya Historical Museum



- 1/ 南側全景。屋根は鉄平石葺き。
- 2/ 玄関のある南東側外観。
- 3/ 1階の展示室兼ホール。



建築概要	
所在地	長野県茅野市 宮川高部389-1
用途	史料館
設計	藤森照信+内田祥士(習作舎)
施工	田村建設
設計期間	1990年4月~7月
工事期間	1990年8月~ 1991年2月
敷地面積	973.54㎡
建築面積	134.12㎡
延床面積	184.43㎡
主体構造	鉄筋コンクリート造、 低層部一部木造

※1 神長官守矢史料館

入ってきた。壊して建てる時、マンションに建て替えるなら拡大再生産だから市場原理でもできるけれど、単純再生産や縮小再生産のときには、どうするんだろうということとを漠然と考えていました。だから修士のときに「建築の維持について」とテーマを設定しました。

じつはそれまでは奈良を歩きまわっているようなタイプでもあったんです。そこから抜けられないのではとまわりが心配するぐらい。だから近現代は実務の対象ではなかった。藤森先生のおかげで僕なりに見るという視点を獲得するわけですが、それはずっと後のことで、当時は、近代建築実務と、歴史的建造物や文化財に対する思いが混ざった状態で、調査に行くわけです。それで、大嶋さんがおっしゃったように、表しか見えていないのに、断面を描いてたりするんです。

——その頃は、まさか藤森さんと 一緒に建築を設計することになるとは思っていなかったんですね。

内田 思っています。当初、建築主の茅野市は、藤森先生に「相談ののってほしい」というぐらいの話だったと思います。それでどうしようかと言っているうちに……なものかが降臨したんですよ、先生に(笑)。

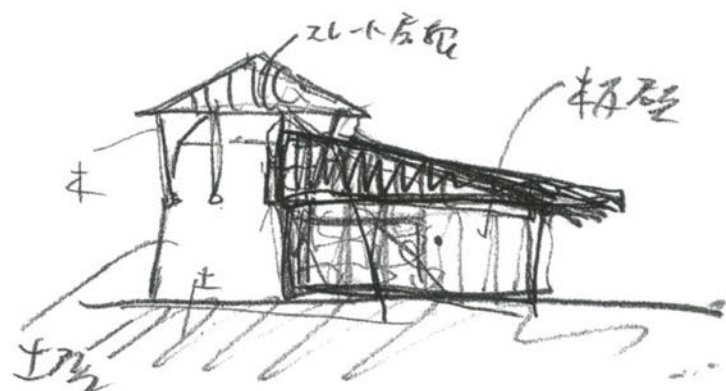
最初のはわけのわからないスケッチでした。下がキノコみたいな丸いもの(スケッチ1)。僕も 応、増沢事務所ですからね(笑)。モダニズムとか工業化とかいうものに 定の理解をもっているわけです。これを見てどうしようかと思いました。その後の案(スケッチ2・3)で、ちよつと屋根が前に出てきて、後ろが四角くなってきたときに「これなら、建つ」と。僕でも建つかなど。そう思っているうちに、 緒にやることになった。いつ、どういうきっかけだったかは具体的に思い出せませんが、気がつくやうなことになっていました。

「君、うんぬん」

——大嶋さんはいかがですか。

大嶋 私は武蔵野美術大学を出て建設会社で現場監督や設

[スケッチ 2]



[スケッチ 3]



藤森照信さんが描いた「神長官守矢史料館」のスケッチ3点。最初の[1]は協同設計者の内田さんを戸惑わせた。その後の案[2][3]を見て、ようやく内田さんは「実務的にこれならなんとかなるんじゃないでしょうか」と藤森さんに言ったそうだ。形も仕上げも実施案に近い。

Akino Fuku Art Museum



4 / 第2展示室。
5 / 南側外観。尾根の端に、尾根をまたぐようにして立つ。
6 / 第1ホール。この部分は木造。



建築概要	静岡県浜松市天竜区 二俣町一俣130
所在地	美術館
用途	藤森照信+内田祥士(習作舎)
設計	大林組名古屋支店
施工	1995年9月、 1996年3月
設計期間	1997年11月、 1997年6月
工事期間	敷地面積 1万9769.43㎡
敷地面積	延床面積 746.17㎡
建築面積	延床面積 999.64㎡
延床面積	主体構造 鉄筋コンクリート造、一部木造

※2
浜松市立
秋野不矩
美術館



計をしていました。30歳を過ぎて、あらためて歴史をやりたくなった。仕事としては設計を続けるつもりでしたが、設計するための核のようなものがほしかった。もうひとつ、私も保存ということに対して興味があったので、藤森先生のところでも歴史をやるのがいいかなと。そのときは、藤森先生は歴史の先生なので、設計をするとは全然知らなかったんです。研究室では持ちまわりで学生と先生が発表するのですが、初めてのミーティングが藤森先生が発表する役割で、「神長官」の模型が出てきた。模型だからもう実施設計の段階だったかな。

内田 だと思えます。

大嶋 私が藤森先生と研究室で交わした最初の会話が「神長官」のここにトップライトを付けたいと思っているんだけど、内田君が反対しているんだよ。君、どう思う」。私の答えは「いやあ、先生、これは雨漏りの原因になるからやめたほうがいいですよ」ああそうか」みたいなことでしたね。設計の仕事については、内田さんと計画を進めていた「浜松市立秋野不矩美術館(※2)」以下「秋野不矩」の初期案模型を「3日で作ってこれ」と言われたのが最初です。

その後、「ニラハウス(※3)」で私に声がかかりました。当初は改築の予定で、たまたま研究室で実務経験があるのは私しかいなかったからだと思います。一緒に現地に連れて行かれました。それが一転三転して、結局、新しく土地を買って新築するということになりました。

追っかけが縁で

川上恵一 私の出会いは27年前なんです。信州がらみです。松本の「旧開智学校(1876)」を重要文化財指定にしてくださいと村松貞次郎先生が、後に長野県の近代建築の調査に来られたときに、教え子の藤森先生を連れて来てくださった。藤森先生は路上観察学と重なっていた時代で、あちこち見たり写真を撮ったりしていました。それと同時に、ちょうど長野県の近代建築史誌をやっていたら、松

本を案内してくださいだったんですが、藤森先生は全然違う目線でものを見る。おもしろい人だなあと思っていたら、「神長官」の計画を知らされた。しかも場所は私の家から車で30分くらい。そこから藤森先生の追っかけを始めたんです。東京にはツルツル建築しかないのに、ザラザラ建築をやる人がいて、しかも私の地元で、神さまとともにものをつくっている人だと聞いて驚いたんです。

それからずいぶんたって、あるとき急に電話がかかってきました。長野に大きな民家があって、それを直すことになったから手伝ってくれないかなと言われました。僕が民家の再生をずっとやっていたからでしょう。その民家の敷地で「半分は僕のワールドをつくるから、後の半分で保存作業をしてよ」と言われたんです。ところがこの建物が延床130坪もある。長年いろいろ手を入れて維持していましたが、お施主さんにとっては重荷だったのか、結局、全部壊してつくり替えることになりました。その流れでお手伝いすることになったのが「焼杉ハウス(※4)」です。所員を泣かせながらお手伝いしました(笑)。

分業としてやろう

——協同設計の形を発見したことで建築家・藤森照信は生まれたともいえると思うのですが、ほかのいわゆる協同設計とはずいぶん違う仕事の進め方をされていると感じています。実際はどうでしょうか。

大嶋 今の協同設計のスタイルができる元というのは、内田さんですよ。



技術的方向性で僕にはできないという線があります。

by Uchiida Yoshio

Yakisugi House



南側外観。

Nira House

<p>※3 ニラハウス</p> <p>建築概要 所在地 東京都町田市 用途 住宅+アトリエ 設計 藤森照信+</p>		<p>※4 焼杉ハウス</p> <p>建築概要 所在地 長野県長野市 用途 専用住宅 設計 藤森照信+ 川上恵一(かわかみ建築設計室)</p>	
<p>設計期間 1995年5月~ 1997年2月</p>	<p>設計期間 2005年1月~ 2006年3月</p>	<p>設計期間 2005年1月~ 2006年3月</p>	<p>設計期間 2005年1月~ 2006年3月</p>
<p>工期期間 1997年2月~ 1999年3月</p>	<p>工期期間 2006年4月~ 2007年4月</p>	<p>工期期間 2006年4月~ 2007年4月</p>	<p>工期期間 2006年4月~ 2007年4月</p>
<p>敷地面積 482 37㎡</p>	<p>敷地面積 1824 72㎡</p>	<p>敷地面積 1824 72㎡</p>	<p>敷地面積 1824 72㎡</p>
<p>建築面積 106 60㎡</p>	<p>建築面積 170 29㎡</p>	<p>建築面積 170 29㎡</p>	<p>建築面積 170 29㎡</p>
<p>延床面積 172 62㎡</p>	<p>延床面積 166 92㎡</p>	<p>延床面積 166 92㎡</p>	<p>延床面積 166 92㎡</p>
<p>主体構造 木造</p>	<p>主体構造 木造</p>	<p>主体構造 木造</p>	<p>主体構造 木造</p>

食堂 居間。

道路側外観。

内田祥士



Uchida Yoshio

1955年東京都生まれ。78年早稲田大学理工学部建築学科卒業後、増沢建築設計事務所勤務。89年東京大学大学院退学後、習作舎設立。90年習作舎代表。現在、東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科教授。2002年「妙壽寺庫裡」(95)でJIA環境建築賞受賞。07年「東洋大学 朝霞校舎 実験工房棟 (改修/久米設計と協同)」(05)でBELCA賞受賞。おもな著書=「東照宮の近代―都市としての陽明門」(ぺりかん社)。

内田 さつきも言いましたが、最初は、ちよっとこれはなあというスケッチが出てくる。その後これなら建ちそうだなあというスケッチが来て、実施図も描けるかなと思うんです。失礼な言い方ですが、私が建築として考えられるという意味です。「実務的にこれならなんとかなるんじゃないでしょうか」と言った記憶があります。で、一生懸命、図面を描いていくんですけど、明らかに私が自分でやるべきとは違うものなんです。それはまちがいない。だから、デザインについては藤森先生には何も言わない。つまり、分業としてやろうと思ったんです。藤森さんがデザインされて、それを僕が受け入れられなければどうしようもないんだけれど、あまり一体化するとか、批判するとかという姿勢ではなくて、どうやれば建つか、というふうを考える。おそらくヨーロッパのエンジニアリングの事務所のようにだと思えます。ただ当時は、まだ、ストラクチャーがまったく見えなくなるということについては抵抗がありました。だから「神長官」も、「秋野不矩」も木造部分の構造は本物が見えているんです。誰も本物の柱梁だと思わないんですけれどね。それが全部見えなくなるのが、「ねむの木」ことも美術館(※5)以下「ねむの木」です。

「ねむの木」で、木造は、柱を除いては完全に見えなくなっている、あそこは技術だったんだと思っただけです。それまではね、僕がやると構造が表に出てくるんです。

デザインに対してできないのではなくて、技術的方向性で僕にはできないという線があります。そこはやらない。そういう話をしていくうちに、藤森さんも「そこはおまえが言うならそれでいいだろう」と。さつきのトップライトもそうです。「秋野不矩」でついに開けるんですが(笑)。僕はやめたいわけです。まあ、あれでもトップライトは、ち

よっとという思いはあるんだけど、とにかくできるだけの技術的にどうすればフォルムとテクスチャーが成立するか、そういう感じです。

大嶋 内田さんはプランニングでお手伝いしたところがありましたか。

内田 いや、プランは出てきたのをそのまま……。

大嶋 なんてそういう質問をするかというと、私が曲がりなりにもプランニングのことで先生と話したのは、「ニラハウス」までなんです。

今は、プランは基本的なブロック、固まりみたいなものがある。そのほかはおまかせ。ただ、「ニラハウス」のときは、水まわりも含めて打ち合わせをしていた記憶があるんです。最初の頃は内部も完成に近い形で出てきていたんですか。

内田 「神長官」のときは少し細かく描かれていたように思います。メインの入り口と、奥に斜めに入っていく展示室でもそれ以外のところは、おっしゃったようにブロックが決まると、後は僕のほうで進めました。

大嶋 基本的にそうなんです。私の場合、たまに水まわりが真っ白になっていて「おまかせ」と書いてある。

内田 そういっちはなかつた。

大嶋 それを見るとわかるんですよ。今回、先生がやりたいのはこのへん……と。

内田 「タンポポハウス(※6)」のときは、台所は奥さまにおまかせだったような気がする。

大嶋 「タンポポハウス」で、付属屋と真四角のピラミッドを分離したのは先生ですか(13ページ平面図参照)。

内田 そうですね。全体をひとつの完結したものにしたかった時期もあったのかもしれない。後から考えると、不思議

Nemunoki Children's Museum of Art



10/西側全景。
11/第2展示室。外観で特徴的なマンモス、あるいはドンクリのような屋根の内側。



※5 ねむの木 子ども美術館

建築概要	静岡県掛川市上垂木
所在地	ねむの木学園内
用途	美術館
設計	藤森照信+内田祥士(習作舎)
施工	石川建設
設計期間	2004年4月~
工事期間	2005年7月~
	2006年9月
敷地面積	2838.6㎡
建築面積	424.05㎡
延床面積	462.86㎡
主体構造	鉄筋コンクリート造、一部木造

大嶋 信道



Ohshima Nobumichi

1960年鳥取県生まれ。84年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。84～90年建設会社勤務を経て、90～94年東京大学生産技術研究所藤森研究室。91年大嶋アトリエ設立。2003年より武蔵野美術大学非常勤講師。99年「倉吉の町屋」(87)で鳥取県景観大賞受賞。掲載した以外のおもな藤森照信さんとの協同設計作品＝「一本松ハウス」(98)、「ツバキ城」(00)、「不東庵工房」(01)、「養老昆虫館」(05)、「茶室 徹」(05)。おもな著書＝「建築虎の穴見聞録——訪ねて歩く材料と工法」(新建築社)。

議なものがかくつついているフォルムなんです。

大嶋 あれは内田さんのアドバイスかと思っただけで違うんですか。

内田 違うと思う。

大嶋 北側のポリウムは完全に分離されている。これが効いているんですね。

内田 それは、離さないと納まらないですよ。

大嶋 くつついていた時期もありますよね。

内田 そうかなあ。つなげると納まらないと言ったかもしれない、僕が。

大嶋 それじゃあ、こうしようか、ということに。

内田 僕のグチを聞いてくれた可能性はありますね。

大嶋 けっこう変な間取りなんですよね、これ。

内田 ご自宅ですからね。ああじゃないですか、こうじゃないですかと僕も 応言したんですよ。そうしたら、ある

とき「これ、俺の家で、設計者がいいと言っていて、施主もいいと言っている」と言われてね。以後、この建物については、施主が「よし」と言っているんだよなって、何度自分にも言い聞かせた覚えがあります。

結論だけがやってくる

——かわり方は大嶋さんの場合には違いがありますか。

大嶋 少しだけ違うかもしれません。私は内田さんの仕事ですであつたので、そういう意味ですごくやりやすかったです。先生は、プランニングについてはだんだん関心がなくなってきた。施主と協同設計者にまかせておけばちゃんとしたものになると見切ってしまったという感じですか

ね。最近の仕事の「チョコレートハウス(※7)」では、3間半×4間の3階建てがドーンとあつて、茶室が飛び出して、キッチンが飛び出して、というスケッチがあるんですけど、間取りがよくわからなかった。「じゃあ、後はお施主さんと話してくれ」と。最終的には全部変えました。ただし、骨格は変わっていません。1階が鉄筋コンクリート造、2、3階が木造、ちゃんと茶室が飛び出して、キッチンが飛び出している。

——宿命的に形が決まるのですね。

大嶋 そこに至るまでの過程は、基本的に私でさえ知らないんですよ。それ以前の段階というのは、たまに先生のスケッチが雑誌などで発表されるのを見ますが、うちに来るときには、ある日突然、だいたい夜中にファクスで届くんです。結論だけが来ます。最近先生のスケッチの数がすごく少なくなっています。

たとえば茶室の「二夜亭(※8)」。窓はここに開けて、こう引く。そのためには袖壁で引いた跡を隠す。窓の前に炬を切る。こういう木を杭にしてやる。壁は土塗り、屋根は杉皮、でトップライト。プランとテクスチャーと、パネル構法でやるという構造までファクス1枚にまとめられて来る。後はそれを膨らませたり、微調整をしたりという話。最後までぶれないことが多いですね。

内田 夜中にファクスが来るのは、僕の頃からそうでした。最初は返事をしません。しばらくするとまた来るんです。待っている時間がありましたね。先生は腹を立てていたかもしれないですが(笑)。それで、いろいろ変わったたりするけれど、変わらないところもある。やがて変化が小さくなって落ち着いてくる。全体で月単位の時間だったと思いません。それを通して眺めているうちに、このへんかなあと思

Tanpopo House



※6 タンポポハウス

建築概要	東京都国分寺市
所在地	専用住宅
用途	藤森照信+
設計	内田祥士(習作舎)
施工	白石建設
設計期間	1990年1月～
工事期間	1994年12月～
	1995年10月
敷地面積	289.66㎡
建築面積	109.12㎡
延床面積	187.24㎡
主体構造	鉄筋コンクリート造

12/南東側全景。東京郊外の普通の住宅地に立つ。
13/1階の主室(居間兼客間兼茶室)。

って、これならこうすればできると思うというものを定規の図面にして返します。

大嶋 私のおきにはすでにそういう過程の段階はすべてはしよって、先生が自分のなかで完全に思考を熟成させて、これでいこうという結論だけが来るようになっていましたね。

ただ、プランニングでひとつ言うと、先生のプランニングは素人ではないから階段とかはきちんとならなっている。問題は水まわり。「面積がちっちゃすぎるんですよ。」

内田 それは僕も思う。

大嶋 これじゃキッチンが納まらないとか(笑)。逆に言うくと、協同設計者の仕事はそういうのを調整していくことなんです。水まわりや収納を充実させて大きくしていく。そのために階高を高くしたり、水平方向に延ばしたりして調整される全体のプロポーションということについては、先生はあまり細かくは言わない。

プロだけでもダメ 素人だけでもダメ

川上 僕の場合、最初は心配でした。先生は「焼杉ハウス」のときすでに「神長官」から16年たっていて、大抵のことはやったことあるから心配いらないうちと言われました。その後「プラン」ができました。お施主さんと呼んであるから「高過庵(※9)」に来てくれないか」と連絡が来ました。お茶を飲みながらプランを見ていたら、お施主さんは感激して拍手喝采で、発で決まったんですね。ところが、少しゆっくり考えてみたら、いろいろ納まっていけないんですよ。間取りが(笑)。奥さんがこれじゃ暮らせないわと言いついて調整に入りました。でも、フォームそのものは変わっていません。内部のいろんなことには、先生、興味ないからいいよって言うわけですよ。ただ、僕は突き出したお茶室は心配でしたが、先生は「大丈夫、大丈夫、これでもつよ」と言うんです。確かに大丈夫でした。

かなりまかせてもらったという気はしていますが、叱られたところがあります。僕の仕事は職人さんと一緒にやる。

きれいにきれいに仕上げようということをやっていた。それがまったくまちがいだった。

「焼杉ハウス」の食堂・居間の床・壁・天井は大陸張りといって、短い板を張り並べる、おおよそばななよう細かい仕事なんです。これをきれいにしつくりなきやと思って、大陸張りの目地を、隙をつくらない張り方にしました。先生が見に来て、現場では何も言われなかったけれど、夜になって電話が来て「あの洞窟はないよ」と言うんですよ。「洞窟って言ったでしょ」って。

内田 それは大変ですね。

川上 どうしましょうってことになりました。大工さんも職人さんも、みんな誉めてもらおうと思ってやっていたわけですよ。それで洞窟のサンダーがけを……。

大嶋 じゃあ、最初はきれいに鉋がかがかかっていた。

川上 ええ、すごきれいに。テーマは洞窟と言われたのは、確かに覚えていたんですけど。一生懸命やるわけですね。木が、隙間が開いてしまうから、捨て張りしてからもう一回やる。でもそれじゃ洞窟ではないわけですよ。足場を組み直して、12人人工かけて、ディスクサンダーで荒らしたんです。

大嶋 「タンポポハウス」の壁もそうですね。

川上 それを見に来いと言われました。

今日は協同設計という話ですが、私は完全に黒子に徹しようと思っていて、先生のやりたいこと、施主の奥さんのねらっていることを形にしたいと思った。ただ、「焼杉ハウス」の大屋根の勾配は1寸5分しかないんですよ。これを銅板折りで納めたよと言いました。納得してもらって

重ね着すればいい
という発想が
藤森建築の基本ですね。

by Ohshima Nobumichi



Chocolate House

14 / 南西側全景。飛び出した茶室。



15



※7 チヨコレートハウス	
建築概要	東京都国分寺市
所在地	専用住宅
用途	藤森照信+
設計	大嶋信道(大嶋アトリエ)
施工	宮嶋工務店
設計期間	2006年3月~
工事期間	2008年6月~
敷地面積	2009年5月
建築面積	332.62㎡
延床面積	63.87㎡
主体構造	木造、一部鉄筋コンクリート造



完全に
黒子に徹しようと
思っています。

by Kawakami Keiichi

カラーステンレス瓦葺きです。茶室の屋根などは銅板折りで、私も一緒に折りました。漏らないだろうという直観はありました。最初は心配していた茶室も、8人のつてもまったく揺れもしません。

大嶋「焼杉ハウス」の茶室は塔屋扱いでしたね。「チョコレートハウス」では3階部分に茶室があったので、経験的にもっている勘を計算で裏づけるというテーマで、厳密な構造計算で確認申請を通しました。

川上「焼杉ハウス」で楽しかったのは、この「焼杉」を焼いたときです。所員全員を連れて、ご近所の人も連れて行って田んぼでやりました。藤森という同じ名字の、すごく器用な勘のいい方がいらつしやるんです。その人の指導で焼きました。3枚の杉板を筒状に組んで立てて根元の新聞紙1枚に火を付けて燃やすんです。やり出したら、おもしろくてやめられない。

ついでに先生は焼き肉の段取りをしていたんです。焼杉が終わってからの宴会用。エンターテインメントがあるんです。大嶋さんも来てくださいましたね。

内田 僕は現場でエンターテインメントはダメなんです。度も参加したことがない。僕が手を出して何かつくるともしていません。見本は別ですけれどね。現場というのは聖地みたいな思いがあるんです。

川上 先生はこんな楽しいことを職人にまかせたらもったいないという考え方ですね。

内田 それはよくわかります。

川上 先生は、木を山から伐ってきて、その処理を大工さんに指導するんですよ、曲面鉋で。指導された大工さんは、ああ、これならこうやったほうがいいよと、さらにいい方

法を教えてください。先生は、それがいい、と言うわけですよ。左官にしても、素人でもやれるんだけれど、素人のよーに見せてプロがやると、もつと素人っぽく、よくなるという話をしていましたね。だから、プロだけでもダメだし、素人だけでもダメだと。家ってそんなに緊張したものをつくるんじゃないかと、ヘタウマとか、下手でも情のこもったものは違うんじゃないかということは、言っていられないような気がしますね。

表層のウラで

大嶋 今まで藤森建築について、内田さんと私が直接話したことはなくて、川上さんともないですよ。

内田 はい。

川上 ないですね。

大嶋「焼杉ハウス」のとき、川上さんには、これまでのこと、なんでも聞いてくださいと言いましたが、実際はほとんどなかったですね。

川上 ええ、2、3回ですね。壁の下地をどうしたらいいかとか。

大嶋 そのくらいですよ。逆に言うと、藤森建築が成り立つためには、目に見えるテクスチャーの背後の構成というか、仕組みがすごく重要で、自由に自然素材をまとうためには、すごくちゃんとした下地があるんです。

最近、パワードスーツという言い方がありますがね。パワードスーツを建物の骨組にまっずせてあげて、それが、防水、断熱、防火、そういつたいゆる近代の建築としての機能を受けもつ。その上に、ジャケットをかぶせる。ジャケットは、自然素材、ナチュラルマテリアルですね。昔の建物は、ナチュラルマテリアルのコートしかもっていません。性能を確保できなかった。せつかく開発されたんだから、重ね着すればいいじゃないかというのが、藤森建築の基本だと思えます。モダンズムでは、そういうことをやってはいけないという教条のようなものがあります。すけれどね。

Ichiya-tei



一夜亭

※8

建築概要	
所在地	神奈川県足柄下郡
用途	茶室
設計	藤森照信+
施工	大嶋信通(大嶋アトリエ)
設計期間	縄文建築団+俳優座劇場
工事期間	2003年1月~2月
延床面積	6 4㎡
延床面積	6 4㎡
主体構造	木造

16 茶室内部。
17 北東側全景。パネル工法による木造
屋根は杉皮葺き。

17

16

私がそれを自覚したのは、第1作の「神長官」の、下地のデッキプレートなんです。既製品のデッキプレートをわざと見せた上に石屋根を置く。石屋根だけだと、水を100%は止められないけれど、下をデッキプレートでやればいいと。すごくびっくりした覚えがあるんですよ。

内田 すいません(笑)。

大嶋 あの自然素材をまとうための仕組みは、先生じゃなくて内田さんが発明したものでしょ。

内田 発明したっていうか……。ダブルスキンの発想は、モダニストならありますから。あれは、石だから屋根が重いです。床レベルの重さなんです。だから床材じゃないと支えられない。そうすると、いわゆる屋根用のやつではダメですから、デッキプレート。亜鉛の溶融メッキのものを探して、それを重ねました。

大嶋 ダブルスキンにすればいいじゃないかというのは、コロンプスの卵みたいで、あたりまえだと言われるかもしれないけれど、高層のオフィスビルとか、ダブルスキンは基本的には近代のものと同代のものを重ねる……。

内田 ああ、そうです。そこは違う。

大嶋 だから当時びっくりしました。私がやっているのはその発想の応用です。外にまとう自然素材に適した下地を、近代の工業製品のなかから探してくる。ある種のプリコラージュですが、工業製品を本来の使い方ではない使い方を使う。

内田 僕は自分を説得しているんですよ。ダブルスキンという論理であれば乗り越えられる、つまりやってもいいだろうと。苦渋の選択です(笑)。

川上 僕は違ってまして。民家をやっているものですか、どうしても構造と仕上げはそのまま表と裏の体にし

たい。モダニズムと同じ方向なんです。確かに先生は、構造は現代、仕上げは違う、ザラザラだ、とおっしゃる。じつはちよつと抵抗がありました。

内田 ああ、そうですね。僕もストラクチャーのフェイクはできるだけ使わないというふうにはしていますが、藤森さんと仕事をしなかつたら、僕はフェイクのテイストをどうするかということを考えないまま、生、生きていったと思う。

フェイクのない建物はいいんですよ、実際は。そういう意味で表層は大事だろう、ということですよ。以前、僕が断面に興味があると言ったときに、先生に「地球の断面の意味があるか」みたいなことを言われた記憶がある。表層のほうが大事でしょうと。地球の断面を描くと、表層は薄すぎておそらく線にもならない。だけれども、それがすべてだと。断面派としては、ちよつとなあつていう(笑)、でもおもしろい議論をした。で、フェイク、表層を僕がやむをえずやっているという感じだったとすると、藤森さんは積極的にやっているということですよ。やるなら積極的に。それは正論ですよ。

大嶋 表現として、真面目に、覚悟して使えば、ちゃんと聞き直れるというか、フェイクという気はしなくていい。

内田 今、思い出した。「神長官」を建てたときに、僕は何人かから言われたんですよ。「歴史家の妄想で終わるべきものを……」と。

大嶋 その批評、内田さんのまわりにガチガチのモダニストが多かったからでしょう。

内田 いずれにせよ、僕としてはそれに対して言える言葉はないんです。けれど、そういう話を聞いて、ニコツとしていらつしやるわけですよ、藤森さんは。

川上恵一



Kawakami Keiichi

1952年長野県生まれ。75年早稲田大学理工学部建築学科卒業。75～81年北野建設。81～93年降幡建築設計事務所。93年かわかみ建築設計室設立。2002年より信州大学非常勤講師。03年より早稲田大学非常勤講師。05年より塩尻市文化財審議委員。06年より長野県建設工事紛争審査会委員。07年「O邸(再生)」(06)でふるさと信州の住まいコンクール奨励賞受賞。08年「竹風堂松本中町店(増改築)」(08)で松本市都市景観賞奨励賞受賞。おもな著書＝「住み継ぐ家の物語——設計職人の仕事とその家族たち」(オフィスエム)。

Takasugi-an

18／茶室内部。左手には構造のクリの木が飛び出している。
19／南側全景。床レベルは地上約6m。



高過庵

※9

建築概要	
所在地	長野県茅野市
用途	茶室
設計	藤森照信
施工	直営(縄文建築団+藤森三雄+立石公勇+中村孝+飯田安哉)
設計期間	2003年8月～10月
工事期間	2003年10月～2004年6月
建築面積	62.4㎡
延床面積	62.4㎡
主体構造	木造

藤森語録

トラウマか、執着か



語録／二

建築の外観の起源は柱



究極の建築材料とは何か？ という問いが私にはずっとある。鉄やコンクリートといった工業材料でないのは当然だが、木、土、石、草、竹などなどの自然由来の材料のうち、どれが人間にとって根本的な建材なのか。長いあいだ、木だと思っていた。そう重くないし、誰でも手で扱えるし、そもそも木の成育する森は人類の出所でもある。原始人の住まいは、たいてい木の枝や草でできているし。でも今は、土こそ究極と考へ直している。子どもの手でも扱えるし、水と合体して初めて形を成すという性質もなかなか含蓄は深い。土と水と手。それより何より、手で土を扱っていると、みな作業に没頭して無口になる。土は、人の意識を吸収するといふとんでもない能力を秘めているらしい。没頭とは、土に脳みそが没してしまうこと。

デビュー作となる「神長官守矢史料館」(1991/写真)を設計しているとき、全体の形は決まったものの、流れ下る屋根の軒先がなんだかわ物足りなく思い、あれこれやっていると、鉛筆がすべり、軒を支える支柱の先が軒の水平線から飛び出してしまった。あっこれだ、と思い、柱を屋根を破って突き出させた。これが、突き出す柱や塔状の形への根深い好みを自覚した最初で、以後、世界中のスタンディング ストーンやウッドを訪ね歩くことになる。その後、あれこれ思索は深まり、柱立ては古代の太陽信仰の産物であったこと、そしてそれが建築というものの外観の起源であること、を認識しているが、なぜ私がそうした形に魅せられるのか、についてはどうもはっきりしない。気づいたときには自分の中にすでにあったもの、そう説明するしかない。

藤森照信さんの建築作品を眺めると、まことにもって自己に忠実。やりたいうことにこだわり、やりたくないことは一顧だにしない。繰り返し、変身し、その自己忠実度は真に高い。あらためてトラウマのごときその執着について、自身に分析してもらった。納得できればよし、不可解募ればなおよしとして。 文 写真 藤森照信

語録／一

土こそ究極

語録／三

縄文建築団

第3作の「ニラハウス」(97/40ページ写真7参照)をつくったとき、赤瀬川原平筋の友人知人を呼んで、プロのいやがる作業を手伝ってもらった。意外だったのは作業が終わってからのみなの反応で、また呼んでほしい。だった。人は建設作業が好き、という建築界では、度も言われたことのない真理をこのときつかんだ。以来、私の設計には、必ず素人参加の部分が含まれるようになる。誰でもやれる仕事があり、どの仕事でも全体のなかでの位置がひと目でわかり、多勢が集まらないと完成しない。しかも、一つひとつしかつくない。もうこれはほとんどお祭りに近い。祝祭性を秘めた現代の唯一の製造業にちがいない。ここにこそ、建設という領分のない。ここにこそ、重要性があるのではないか、と思うのだが、このことを知るのには、私の建築を手伝う素人集団の縄文建築団だけ。

家は火を守るもの

世間の人はむろん建築家でも、住宅は風雨風雪から人を守るために成立したと考えている。私も長いことそう思ってきた。でも、今は違う。住宅は、人ではなく火を風雨風雪から守るために成立したのだ。住宅の核となるのは火だった。野原でも森のなかでも、火を焚き、その火のまわりに人が集まり、そこに生まれた身は暖かく心も温かい場と人間関係こそが、住まいの起源にちがいない。住宅という人工物は、そうした場と人間関係を生み出してくれた火を消さないよう、後から取り付けられたカバーなのである。茶室が建築の基本的単位と私が見なす理由のひとつは、あれほど小さくても、ちゃんと炉が切られ、中に火が投じられているからだ。よって、住宅には火が、可能ならガスでも炭でもなく、木を燃やす生火がほしい。焚き木から上がる炎くらしい見飽きないものはない。

語録 / 五

地下は昏くらい

人類は、昔、穴の中に住んでいた。土の中にいたのである。こう知ったとき、原始住居として、入り口が狭くて中が袋状に広がる空間を思い描いた。でも、本当の原始時代の穴居をフランスはラスコーで見ても、まちがいであることを知った。原始時代の穴居は、入り口も広く見晴らしもよいテラスのような半オープンな穴に限られる。袋状の暗い穴の中で人類がなしたのは、ラスコーの洞窟絵画で知られるように、野牛やマンモスの絵をリアルに描くことだった。土中の穴は、精霊たちがそこで生まれ、そこに帰る場だったのである。日本の古代の人々は、自分の魂（精霊）がそこから来てそこへ帰る場のことを冥界みやうかいと名づけ、その暗がりについては昏くらいと記した。私はこれまで、住宅に地下室をつくることなど思いもつかなかった。考えたくもない。片方がオープンな洞窟は大好きだが、地下はダメ。

語録 / 六

畳はへん



畳を使ったことはない。ふつうなら畳にするところには、籐ゴザを敷く。畳の面をじっと眺めてみたら誰でもわかるが、なんとも落ち着かない。畳と畳の目地に、布製の縁が一本走ったり、二本走ったり、ないときもある。並び方も、規則のあるようなないような。そうした畳のへんさに気づき、山田守は自邸の畳の縁をすこく細くし、かつ、どの目地も一本だけ縁が通るように工夫した（写真）が、私はそれを見て、もっとへんだと思った。おそらく、畳は日本の伝統建築のなかではアンタツチャブル領域に属する。日本の室内空間がその上に展開する基準面のようなもので、碁や将棋でいうと盤面のグリッドにあたり、そこには手をつけてはならない。さわらぬ神にたたりなし。

語録 / 七

障子も竹も“ジャパン”

障子を使おうと思っただことはないし、竹を使うときも、縄で巻いたりして隠し、表現の表には出さない。あくまで縁の下の力持ち。理由はまことに明白で、障子の榾目（とじめ）というかどうか知らないが、の一つひとつに、竹の一節一節に、*ジャパン*、*ジャパン*、と書いてあるからだ。人は、障子や竹を見ると、そのデザインや材料の質ではなく、その記号性のほうに先に反応し、そこで判断を停止してしまう。私は、素材主義とでもいうべき立場だから、素材の材感より、その文化的国籍や伝統が先立つのは困る。土も木も竹も石も草も、自然由来の建築材料は、国や文化の枠の出現よりずっと先に出現し、後から国や文化やそれぞれにすぎない。自然素材は鉄やガラスやコンクリートと同じくインターナショナルなのだ。

何に似ても許されない建築

45歳で初めて設計を手がけることになったときの困難のひとつは、過去のどの国のどの時代のスタイルにも似てはいけないし、それより何より、現代の誰の作風も感じさせてはならないことだった。過去に少しでも似れば、^〇やっぱりおまえは歴史家だな^〇と言われるし、現在の誰を感じさせても、いろいろ言ってもつくらせりゃこれかと、日頃書いている文まで軽く見られる。あれこれ悩んだ果てに、誰が何を言おうとかわない、自分で本当につくりたい建物をつくればいいと腹を決め、そしてできたのが神長官守矢史料館だが、できてみると、幸いどこの誰にも似ていない。こう書きながら思うのだが、古今東西どこの誰の形にも似てはならないという形の四面楚歌のなかで、材料、それも現代建築ではあまり使われない自然材料に突破口を見出したのかもしれない。

語録 / 九

木材は太鼓落としに限る

山に入って木を探し、気に入ったのを見つけて伐り出し、製材所に運んで挽いてもらうときくらい充実した時間はない。ああ、建築をつくりはじめた、という気が漲る。人間にとって大事な営みがスタートした、と実感できる。でも、皮をむいた丸太をそのまま立てるのは、下品に思う。とりわけ杉や檜の面皮付き丸太は、見ているほうが恥ずかしい。建築とか自然とかいう問題を安易に考えているナ、と思ってしまう。丸太を立てるなら、いつそ四面を挽いて角材にしたほうがいい。一番好きなのは、2面を挽き2面を面皮で残す。太鼓落とし(イラスト)で、太鼓落としの2面の面皮に曲面カンナをかけるのが最良。どうしてなのか。太鼓落としは、自然と人工の接点を感じられるからだろう。



語録 / 十

ツルピカは、たまつたもんじやない

ツルツルピカピカはなんともいやだ。とりわけ近年出現したソーラーパネルのツルピカくらい嫌悪を感じるものはない。あんなものが日本中の建物の屋根にのつたらたまつたもんじやない。20世紀建築の歴史のなかで私が、番価値を認めたいのは、量的に、番手を振ったアールデコの建築だが、私があれば好まないのは、ツルピカの結晶体にはかならないからだ。ミースのガラスも大理石も金属もツルピカだろうに、と問われるかもしれないが、ミースのツルピカには透明感があり、深みが感じられ、いいと思う。ツルピカだけで、その奥まで視線がしみていかないうようなのがいやなのである。

語録 / 十一

茶室には魔が住む

堀口捨巳をはじめ磯崎新、谷口吉生、安藤忠雄など日本の近現代を代表する建築家たちが、茶室を手がけている。でも、彼らの美術館ほかの普通の作品に比べ、イマイチおもしろさに欠ける。茶室という枠のほうが、建築の建築的内容より先に目についてしまうのだ。素人がつくっても、茶室は立派に茶室らしく見えるし、一方、一流建築家がやっても茶室にしかならない。こんな困ったビルディングタイプは世界でも茶室のほかはないのではないか。形式性が究極まで煮詰まっているからに相違ない。私が茶室に関心があるのは、そこに建築というものの基本的な単位を認めるからだ。生物でいうなら、受精した卵子のような存在で、このひとつの細胞がふたつになり4つになり、分裂と増殖を重ねて、世の建築は出来上がっている。

決定的な建築

いわゆる名作といわれるもの、建築史の教科書にのるような建築は、どれも好きだ。そういうものを訪れて、裏切られた思いをしたことはない。ロマネスクに比べてゴシックは嫌いだ、シャルトル大聖堂（1194～1220 再建／文化遺産／写真二）クラスになるとすばらしい。そうしたなかであえて決定的建築となると、やはりピラミッドか。あれ以上の建築はできないと思う。ピラミッドのように人智によるのではなく、人を超えた天の力に導かれてできたものに見えたのはチベットのポタラ宮（1650年代／文化遺産）で、そういう出来は悪いが建築の出来の良し悪しなどどうでもいい領域へと突き抜けていた。私の掌品という思いで好きなのは、スペインのブレ ロマネスクのサンタマリアアデナーレ（写真二、三）とポルトガルの石の家（写真四）、そして島根の（三徳山三仏寺）投入堂（706 開山／国宝／写真五）。



間取りに無関心

プログラム、その前はプランニング、もっと前は間取りと言った。建築設計の基本であるが、関心がない。でも、どうでもいいと思ったり、無視したりしているのではなく、これまでのプランのあり方を変えて自分の新しい提案をしようというつもりがないだけ。私が建築でやろうとすることは、20世紀の新しいプランでなくともできる。たとえば、ヨーロッパの修道院に結晶化する中庭と回廊のプランとか、石器時代の穴居に見られる 方が完全オーブンの洞窟住居のプランとか。20世紀建築はなんであんなにプラン、プランと言ったのか、と考えるときがある。表面は、機能的、合理性を求めたからだが、それだけではなく、近代における空間概念の発生と深く関係しているはずだが、思案中。

屋根は、建築と自然の離婚を調停する



私は四角な建物をつくったことはない。陸屋根を使うときも、必ず目立つところに宝形や片流れの屋根を付ける。屋根をなぜ付けたがるのか、長らく自分でもわからなかったが、次第にわかってきた。まずひとつは、屋根の軒先を下へ下へと伸ばしていくと地面に至る。実際には至らなくとも、軒の下る勢いは、地面との親密さを感じさせるのだ。このことがひとつ。もうひとつは、韓国の古寺の瓦屋根の姿を丘の上から眺めて気づいたのだが、屋根の山形は、周囲の山々の光景と響きあっている（写真）。屋根は、その山形の頂部によって、建築と周囲の山々の光景のあいだの視覚的な断絶をつくろい、その軒先によって大地とつながり、自然と建築設計を始めてこのかた、自然と人工物のあいだの深い溝をなんとかしたいと考えつけてきた私としては、今のところ、屋根と自然素材にしか調停役は見出せない状態にあるほかの手も見つけなければ。

グロピウスが原点^{ゼロ}

20世紀建築の原点^{ゼロ}はグロピウスである。あの、文化的背景を何も感じさせない造形こそ、科学 技術の時代20世紀にふさわしい。建築史家としてそうしたグロピウスを絶対的に評価するが、しかし、建築家としては、私のやることではない。と考えている。そして、反グロピウスでも、脱グロピウスでもない方向が自分の進む道だと決めている。グロピウスのなしたことを深く理解し、にらみながらしかし自分の関心が時間的にその反対の方向へと転がり落ちていくのを止めることができず。人類は青銅器時代に文字と文明と国家を獲得するが、それ以前人類の心と造形と建築への関心である。建築史的にいうなら、ピラミッド以前への関心。幸い、世界の建築史家も建築家も、ピラミッド以前の石器時代を立脚点にした人はいないので、正確にいうと建築史家はまれにいるが建築家はいないので、ひとり原野をいくような気分である。



藤森さんがあんなに楽しそうな理由

文 イラストレーション

南 伸坊

藤

森さんが、どうしていつも、あんなに楽しそうなのかというと、それは「遊んでいるから」ですね。

藤森さんは、書評をしたり、文章を書いたりして、それはたくさんの人々を楽しませて定評があるけれども、本人は文章を書いたりするのは「とってもイヤだ、気が重い」と、よく洩らしています。

ひるがえって、設計のアイデアを出しているとき、現場で実際にモノをつくっているときは、ものすごく楽しい、気持ちいいと言っています。

現場が好きなのは、その都度臨機応変に、次々に惹起した問題を解決していくことが楽しいということらしい。

設計はもちろんあるが、すべてが細部まで決定しているワケではない。たとえば、屋根を葺くというような作業を、われわれシロート（縄文建築団とかいうが、つまりシロート集団だ）にさせていて、われわれが処理に困ったりしたとき

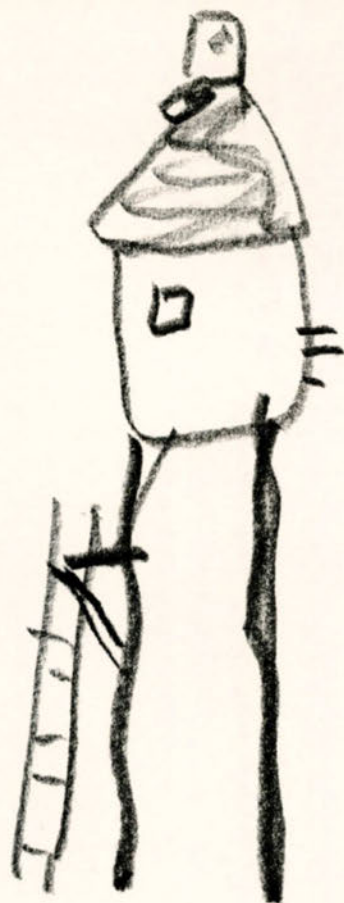
「ここはどうするつもり」なのか親方に聞くと、

「決めてない、ガンバってきとくにやってくれ」という答えである。

しかたないシロートが、アレコレ考えて、苦心してやっとなんとかすると、見に来て「ああ、いいじゃない」と明るく言うのだ。

丸投げというのは、たいがい投げるほうにやる気がないので非難されるのである。が、この場合、丸投げされたほうは、いっしょけんめいになって問題解決をしようとする。その解決能力を引き出すのが、つまり藤森式だ。





こんちの

Minami Shinbo

南伸坊(みなみ しんぼう)／1947年東京都生まれ。漫画雑誌『ガロ』の編集長を7年務める。80年からフリーのイラストレーター、エッセイストとして活躍。また、赤瀬川原平、藤森照信らと路上観察学会を設立。その成果は文章やテレビで発表されている。おもな著書『路上観察学入門』(共著／築摩書房)『装丁／南伸坊』(フレール館)、『仙人の壺』(新潮社)、『本人の人々』(マガジンハウス)、『のんき図画』(青林工藝舎)、『黄昏』(共著／東京赤井重里事務所)など。

藤森さん自身、大工仕事をするのも、工事用の道具を工夫したりするのも好きだが、熟達したいという気持ちはなさそうだ。工夫しているとき、問題解決をするために何か考えているときが楽しい。

設計の基本も、どうも遊んでいる(コンセプトとして遊びをとり入れるというのではなくて、やっているとつい遊んでしまうのだ)。

デビュー作、神長官守矢史料館(1991)では、史料保管室である2階へは、ハネ橋式のハシゴを引き出さないと上がれないようになっていた。

赤瀬川原平邸(97)のニラ屋根は有名だけれども、設計者が最初にすすめた計画は「玄関をハネ橋式にする」のほうだった。まるで隠し砦か忍者屋敷だ。

冗談じゃなく、藤森さんはガキの時分の、かくれ家とか陣地とか、砦とかをつくる気分で「住宅」の設計をしているらしい。

高

過庵(2003)が、世界中の人の注目をあびてしまったのは、このことと無関係ではないだろう。あれは、私の少年時代にとっても「理想の家」である。誰でもがそのことに、スグ気がつくからこそその人気だと私は思う。

そして、それは建築家の「コンセプト」というような代物じゃなく、もっと心の底からの「やりたいこと」なのだ。

藤森さんが、コドモ時分に「ガキ大将」であったかどうか、それは知らない。けれどもガキ大将をやりたいと昔から思っていて、今も思っていることはまちがいない。藤森さんが今楽しそうなのは、それがかなっているからだろう。

当然だが、ホテルのゲストルームは必ずしもコンテンポラリー・モダンが良いとはいえない。ベッドで休む前のリラククスしたい室内は、やや保守的で伝統的でオーディナリーなデザインのほうが気が休まることも多いのだ。実測して「なるほど」というようなものは「パッと見」派手なものでもないことも多い。そしてデザイナーは驚くようなデザインをすることももある。

スイスの、ドイツ、フランス国境にきわめて近い都市、パーゼル。ライン川のほとりにあり、空港や各国の鉄道駅も近い。国を越える環境問題のパーゼル条約や時計見本市で有名なので、若い建築家や学生がこぞって建築行脚に訪れる街としてよく知られている。

新しい建築ではヘルツォーク&ド・ムーロン（*1）のカトゥーン・ミュージアム（1996）とかシャウラガー・ミュージアム（2003）やシゲナル・ボックス（95）。マリオ・ボッタ（*2）のタンゲリー・ミュージアム（96）やUBS銀行（95）。レンゾ・ピアノ（*3）のバイエラー財団ミュージアム（97）など。ちなみにピーター・ズントー（*4）もここ出身。

その街中で、30階建てガラス張りのメッセ・タワー（03）にこのホテルがある。設計はモルガー&デゲロ・アンド・マルケス事務所（*5）。低層部はものすごいキャンティレバード突き出し、1000㎡の大会議室、小さい会議室、レストランなどがそこに入っている。大コンベンション・センター。冬の寒さ対策か、ホテルのエントランスは回転ドアでたいへん小さい。吹き抜けたロビーは間接照明を使っているがなにか



アルプスを望む。

224室のハイスタンダードルームとっているが、そのツインルームに入って点検するといろいろある。まず、床までの全面開口の大胆なガラス・カーテンウォール。二重でガラスが拭けるように内側ガラスは開ける。もちろんブラインドは中。

ふたつのベッドにも仕掛け。くつつけてハリウッド型、よいしょと拡げて離すこともできる（これはときどきお目にかかる）。しかし、身体の大きさを考えるとW900はせまいのではないか。ヘッドボードを兼ねた大きな壁はゼブラウツド（*6）。

何より感心したのはバスルームの床である。一枚ガラスの光床！ ちよつとエツチだと思つたが、便器の腰壁とカウンター以外はほとんどガラスかミラーで照明はすべて内照式。こうすると目地が少なく、清潔で清掃にも便利。淡いグリーンフロストガラスが下からの光を受けてじつに美しい。

しかし待てよ、照明4灯の交換はどうするのだろうか、また、水があふれると漏電しないものか、長寿命のLEDでも何かあったらガラス床を壊すしかないのではないかなどと考えてしまう。便器は壁取り付け。洗面カウンターは壁から離れ、奥行きは小さい。水栓など金物は壁付き、ソープは洗面もバスも固定の金属容器入りと割り切っている。ドアもアクリルの引き戸と迷いが無い。すべて理にかなっている……といっても光床とはよく踏み切ったものだ。効果とメンテを比べて決断をした発注者に脱帽。

その日はル・コルビュジェのロンシャンの教会（55）や現代建築をいくつも見ただだったので、実測していても知恵熱が出そうだった。

さて田舎臭いレストランや地ワインでも探して歩くとするか。

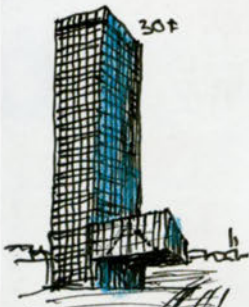
バスルームはガラスの光床

浦 一也／建築家 インテリアデザイナー
1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99年日建スペースデザイン代表取締役。おもな作品＝「ロテル ド ロテル」(88)、「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル」(91)、「飯綱山荘」(91)、「ホテルモリノ新百合丘」(97)、「メディアージュ」(2000)。著書に「旅はゲストルーム」(東京書籍 光文社)がある。



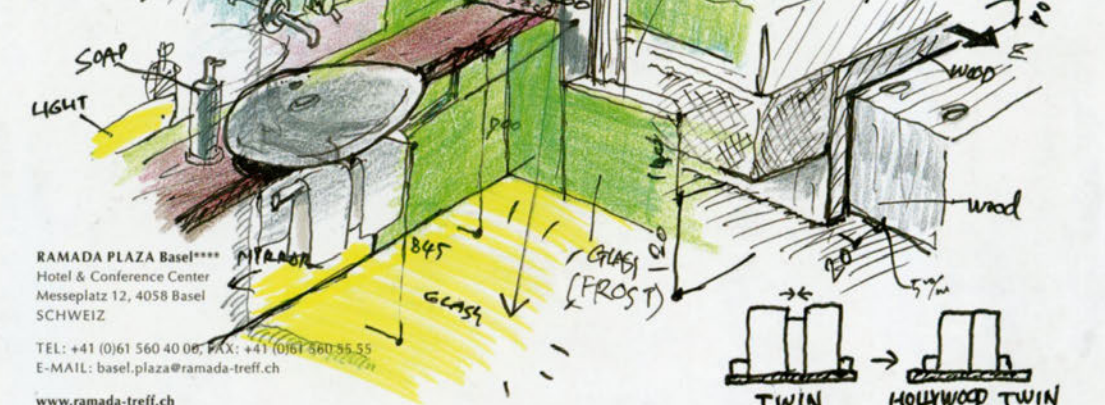
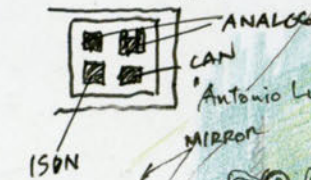
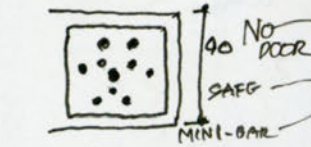
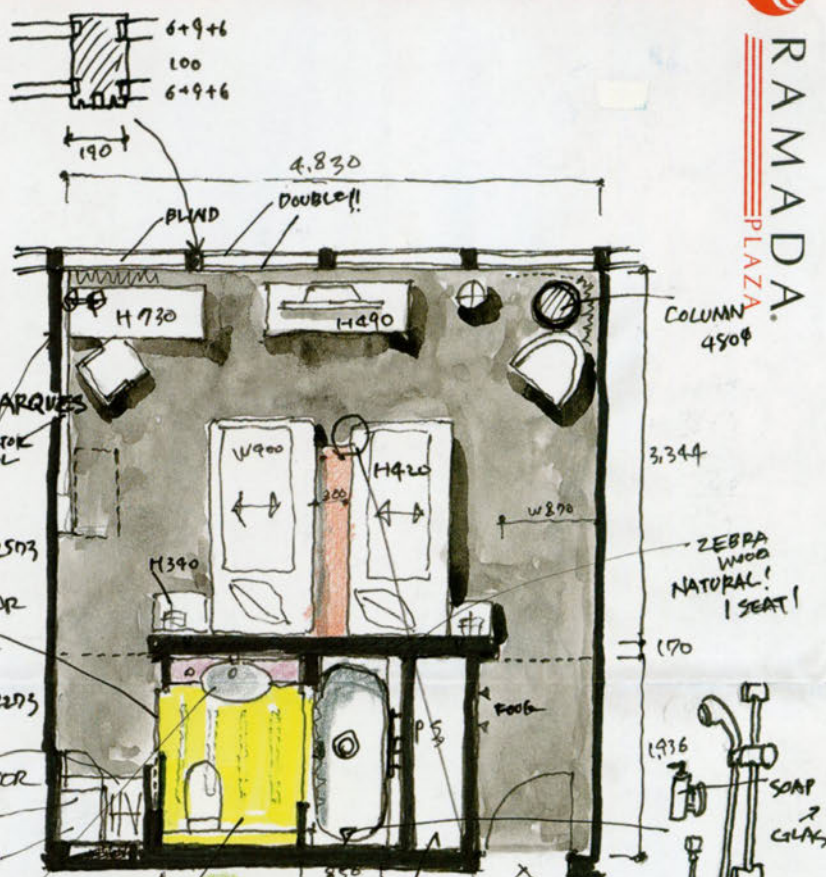
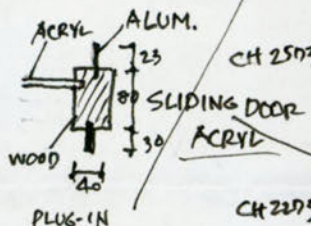
RAMADA
PLAZA

BASEL



ARCHITECT
DESIGNER

DANIELE MARQUES



RAMADA PLAZA Basel****
Hotel & Conference Center
Messeplatz 12, 4058 Basel
SCHWEIZ
TEL: +41 (0)61 560 40 00; FAX: +41 (0)61 560 55 55
E-MAIL: basel.plaza@ramada-treff.ch
www.ramada-treff.ch

*1/ Herzog & de Meuron: 1991-1995
0年生生まれのパーセル出身の建築家ユニット。青山のプラザ、ブティック(03)、北京の国際体育館「鳥の巣(07)」など。
*2/Mario Botta: (1983-) スイス出身の建築家。サンフランシスコ近代美術館(91)、聖ジョハニス教会(98)など。
*3/Renzo Piano: (1937-) イタリア生まれの建築家。ホンビントウセンター(リチャード・ロジャースと共同/77)、関西国際空港旅客ターミナル(94)など。
*4/Peter Zumthor: (1937-) ヴァルスのテルメ(96)、ブルーター、クラウス野外の礼拝堂(07)など。
*5/メッセ、タワーはこの計画のために組まれたモルガー&デグロ、アンド、マルケス事務所の設計。1950年生まれのだニエル、マルケス (Daniele Marques) は、チューリッヒに学んだ。ハインリッヒ・デグロ (Heinrich Degelo) は1957年生まれで、パーセルでインテリアとプロダクトデザインを学んでいる。M.モルガー (Morand Marger) も1960年生まれ。
*6/Zebra Wood: マメ科の広葉樹。アメリカの熱帯雨林に生育。褐色の縮木(シマモク)が特徴。

バスルームはガラスとミラーを多用し、照明はすべて内照式。

RAMADA PLAZA Basel	Add/ Hotel & Conference Center Messeplatz 12, 4058 Basel SCHWEIZ
	Tel/+41 (0)61 560 40 00
	Fax/+41 (0)61 560 55 55
	E-MAIL/basel.plaza@ramada-treff.ch
	URL/www.ramada-treff.ch
	Room Charges/Twin Bed Room 175CHF Double Bed Room 175-235CHF
	1CHF=81.56円 (2010年6月23日現在)

新千歳空港国際線旅客ターミナルビル

取材 文／大山直美 写真／傍島利浩(ポトレートをのぞく)

どんな国のどんな人にも快適に——空港の印象はトイレで決まる

2010年3月26日、新千歳空港の新しい国際線旅客ターミナルビルが開業した。これまでは国内線ターミナルと一体だったが、台湾や中国など東アジアにおける北海道観光ブームにより、利用客が急増。ハインズには出入国客が集中し、チェックインカウンターや手荷物検査場には長蛇の列ができていたという。そこで、国土交

通省は国際線を国内線と切り離し、隣接地に新たに専用ターミナルを建設することを決定。国内線と連絡施設で結ばれた建物は地下1階、地上4階建てで、運営にあたるのは北海道空港(株)。設計は日建・空港コンサル・アラップ・久米・新千歳空港国際線旅客ターミナルビル実施設計業務共同体が手がけた。

ユニバーサル デザインを重視

ビル全体を計画するうえで大きなテーマのひとつとなったのは、北海道空港の平川雄士さんいわく、「誰もが使いやすいユニバーサルデザイン(UD)の考え方を積極的

に取り入れることでした。そのため、学識経験者やUDの専門家、さまざまな身体状況の地元住民などに協力を要請し、総合検討委員会を設けて施設のあり方について検討を重ねてきたという。同社の橋本昌親さんによれば、国内線と国際線を結ぶ連絡施設を新設したの

写真上／ベビーチェアのある男子トイレオムツ替えコーナー。小便器はマイクロ波センサー、尿石抑制システム付き。

3F

女子トイレ

写真右／女子トイレには子ども用小便器を設置(写真中央)。ブースの扉はすべて折れ戸。



写真右+上／パウチしびん洗浄水栓付背もたれが設置された一般ブース。背もたれ部分に切り欠きがあり、必要に応じて引き出して使用する。写真左ページ／広々とした洗面スペース。中央に子ども用洗面カウンター。その右手奥まったスペースがオムツ替えコーナー。右/洗面スペースからオムツ替えコーナーとパウチコーナーを見たところ。



男子トイレ



新千歳空港国際線旅客ターミナルビル南から見た全景。

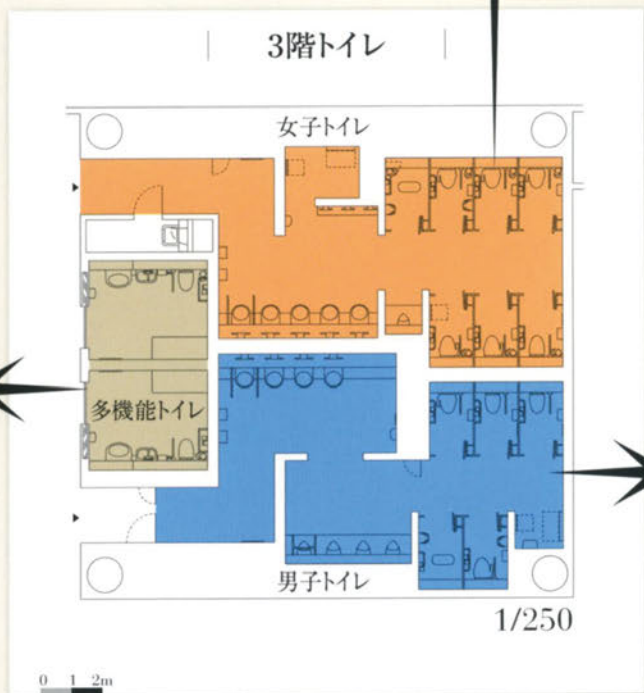


女子トイレ

多機能トイレ



便器と壁は色を違え
わかりやすく。オス
トメイト対応の水栓、
多目的用途の小型ベ
ッドも備えられてい
る。



多機能トイレは左右
使い勝手を変えて2
ブース用意されてい
る。

右中ノトイレブース
は幅1.2m×奥行き2
mあり、国内空港の
なかでも最大級で小

型の車いすが回転で
きる。下ノ各トイレ
に1カ所和風便器も
設置。





男子トイレの壁面は落ちついた色調の木調シート張り。便器は壁掛式便器（レストルームアイテム01）。



男子トイレ

デザイン性に特化したスリムな小便器。パーティションで個室感を高めている。

徹底的にモックアップで検証

も、UDの考え方を重視した結果とのこと。「バスなどでの輸送という手もありますが、寒冷地で雪も降ることを考えると、どんな方にも快適に過ごしていただける空間にするには、連絡施設でつなぐのが最善と考えました」と橋本さん。

当然、トイレにおいてもUDは重要な課題となった。北海道空港ではトイレの実物大模型をつくり、実際にさまざまな身体状況の人や関係者による検証を重ね、改善すべき点の一つひとつ見直して現在の形にこぎつけた。検証によって、壁の色と便器の色が近いと識別しにくかったり、鍵の形状によって手や指の力が弱い人にはドアの開閉がしづらいなど、健常者が見過ごしがちな問題点がいくつも発見できたと平川さんは振り返る。

「空港のトイレは子どもからお年寄りまで、さまざまな人が使いますし、大きな手荷物を持った方も多い。それだけに、トイレの印象が空港の評価を左右すると言っても過言ではありません」と語るのは、設計にあたった㈱日建設計の赤司博之さん。さまざまな人の意見を聞くことは大切だが、「特定の人の使い勝手を重視するあまり、ほかの人の使い勝手が悪くなつては困るので、バランスを保つことを心がけました」と赤司さんは言う。

そういえば、日建設計が以前に設計したトイレも、UDの考え方を取り入れた最先端のトイレとして高い評価を受けたが、赤司さんによれば、「それでもオープンからしばらくして、小型の車いすが入れる 一般トイレプースの奥行きが『あと10cmあれば』も

つとよかったのに」という声が上がったんです」とのこと。ドアの開閉時にもすれば車いすがぶつかることがあり、緊急の際を考えるともう少し余裕がほしいかというのが反省点だったと言う。

その教訓が生かされた今回のトイレは、まず多機能トイレが幅2・7m×奥行き3mで、国内の国際線旅客ターミナルビルでは最大。電動車いすが余裕で回転できる。

方、一般トイレのプースも幅1・2m×奥行き2mで、これまでのビルでは入れなかった小型手動車いすや、旅行客がスーツケースごと入っても余裕の大きさだ。

一般トイレブース用パウチ・しびん洗浄水栓を新開発

一般トイレに足を踏み入れたときに印象的なのは、ともかくどこをとっても広いこと。プースの内部だけでなく、洗面コーナー、通路幅、すべてが北海道のスケールを象徴するような広さで、ビビットカラ

3F



3階 授乳室



1/250

0 1 2m

車いす使用も考慮して 高さが異なる2種類のオムツ替えシートを備えた。

新千歳空港 国際線 旅客ターミナルビル

建築概要

所在地	北海道千歳市美々
主要用途	空港施設
事業主	北海道空港
設計監理	日建 空港コンサル アラップ
	久米 新千歳空港国際線旅客 ターミナルビル実施設計業務 共同体
	4階ゲスト用トイレ/丹青社
施工	鹿島 宮坂 荒井特定建設 工事共同企業体
延床面積	61,269.52㎡
階数	地下1階、地上4階、塔屋1階
構造	鉄骨造(地上階)、 鉄筋コンクリート造(地下部)
設計期間	2006年12月~2007年12月
施工期間	2008年4月~2010年3月
オープン	2010年3月26日

おもなTOTO使用機器

3階女子トイレ

大便器ユニット:UTECS53特/パウチ しびん
洗浄水栓付背もたれ:T95B特+EWC810特
/和風大便器ユニット:UTEW24/洗面器
ユニット:UTEU46特/幼児用小便器ユニ
ット(キッズイレスペース):UTEU特

3階男子トイレ

大便器ユニット:UTECS53特/パウチ しびん
洗浄水栓付背もたれ:T95B特+EWC810特
/和風大便器ユニット:UTEW24/洗面器
ユニット:UTEU46特/小便器ユニット:
UTEU53

3階多機能トイレ

車いす対応ユニット:UTED53特

4階ゲスト用女子トイレ

大便器ユニット(レストルームアイテム01):
XPUTVC11

4階ゲスト用男子トイレ

大便器ユニット(レストルームアイテム01):
XPUTVC11
小便器ユニット(レストルームアイテム01):
XPUTVU11

4階ゲスト用多機能トイレ

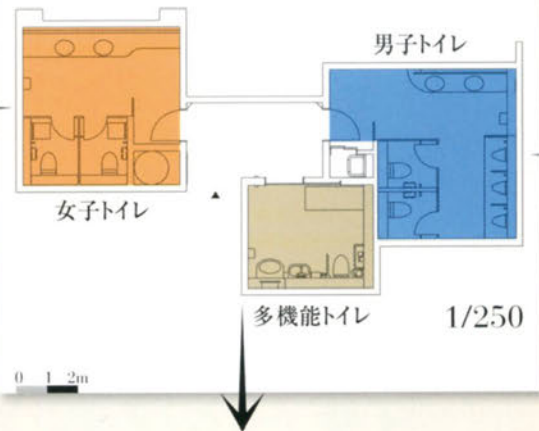
車いす対応ユニット:UTED53特



女子トイレ

写真上/明るい色調
の洗面コーナー。下
/ブース内にはフィ
ッティングボードを
設置。

4階 ゲスト用トイレ



多機能トイレ

右/幅2.7m×奥行
3mのスペースは
国内空港最大で、電
動車いすが余裕で回
転できる。



1の折れ戸が全開したブースがずらりと並んださまはなんと壮観。
設備の見どころとしては、多機能トイレにオストメイト対応の汚物流しがあるのは当然といえば当然だが、一般トイレのブースのひとつにも見慣れない水栓が配置されている。以前開発された製品をモデルチェンジしたというTOTOの「パウチ・しびん洗浄水栓付背もたれ」がそれで、背もたれ部分に切り欠きがあり、必要に応じて引き出して使用する。実際の検証を経て、操作性や安全性にこだわり、何度も試作を繰り返して完成したものだという。
オストメイトの検証に立ち会った北海道空港の橋坂江利子さんは次のように語る。「外見からは身体状況がわからないオストメイトの方にとっては、施設内にひとつかふたつしかない多機能トイレを長時間専有するのはとても気が引けるとうかがいました。パウチの洗浄、交換などに慣れない方だと30分以上もかかることがあるそうです。それだけに、一般トイレ内のブースに簡易に洗える設備があるのとても助かるとおっしゃっていました」

健康者が使用する際には存在をさほど感じさせず、決して邪魔になることもなく、使いたい人が使いたいときだけさりげなく引き出せる製品は、まさにユニバーサルデザインの先進的なトイレにふさわしいといえるだろう。
このほか、男女トイレともオムツ替えコーナーやベビーチェア付きブースを確保し、女子トイレ内には幼児用小便器コーナーも設けるなど、子ども連れ客向けの対策も万全。
別に、ゆとりのある授乳室も完備している。車いす使用も考慮して、高さが異なるふたつのオムツ替えシートを用意し、乳児以外の子どもが落ち着いて待てるよう、ソファも配置。リビングのようなあたたかみのあるスペースに仕上がった。
北海道は、とりわけ東アジアからの身近なりゾート圏としてブランド化されつつある。充実した水まわりは、さらに世界に向けた空の玄関口にふさわしい施設にしたいという意気込みの表れにちがいない。日本の最先端のトイレ空間を、はたして海外観光客がどのように受けとめるのか、その評価が楽しみだ。

Hirakawa Takeshi



北海道空港株
空港部施設課係長

平川雄士

Hashimoto Masachika



北海道空港株
総務部総務課課長補佐

橋本昌親

Hashizaka Eriko



北海道空港株
空港部計画課主任

橋坂江利子

Akasu Hiroyuki



株日建設計
設計部門

赤司博之

「信じる力」がつくる身体も心もあたたたまる家

代表取締役社長

相澤英晴さん

Going My Way——あたたかな家づくりとして誰もが認める「ホクシンハウス」ブランドを築き上げている相澤英晴さんのモットーだ。自分が信じた道をとことん追求する意味でこの言葉を選んでいるという。

高断熱高気密住宅の第一人者であり、社員60人、年商39億円の北信商建を率いる相澤さんの根底には、この「信じる力」があるように思える。それは自分自身だけでなく、まわりの社員も職人たちもクライアントも包み込むエネルギーを秘めている。

高断熱高気密住宅の
パイオニアとして

相澤さんが独立したのは22歳のとき。働いていた建設会社の支店が閉鎖になり、勤めつづけるには地元を離れなければならない、となったとき、独立の道を選んだ。もともと父上が水道工事業を営み、周囲にも建設工事に従事する職人が多かったため、小さな頃から「いざれ建設業」と漠然と考えていたという。

独立後は、水まわりのリフォームなど、小規模な仕事をこなしな

がら、周囲の人たちの紹介で、1件、また1件と住宅の注文を受け、独立2年目には年間10棟を建てるまでになる。そうして建てた1軒の家で結露の問題にぶつかったことが、大きな転機となった。

長野にふさわしい、結露しないあたたかい家をつくりたい。その思いから北海道へ飛んで雪国の住宅を猛勉強。外断熱、内断熱、エアサイクルと、さまざまな工法を研究し、実際に長野でも小屋を建て、まったく同じ条件で各工法を比較検討、その結果生み出されたのがボード状の断熱材を使った外断熱のFB (Flat Board) 工法だった。これが1988年のこと。研究開発はその後、換気システムを採用したFB (Fresh Basic) 工法へ続き、この住宅は「省エネルギー賞」や(助)建築環境・省エネルギー機構から「国内最高水準気密住宅」の認定を受けるなど、数々の賞を受賞する。その過程で採用した工法やシステムには、全館換気システムや桁上断熱の工法など、現在、全国標準となっているものも数多い。高断熱高気密住宅のパイオニアとして、実践を通して着実に進化を続けたことが、現在の

北信商建の基礎を築いたといってもいいだろう。高機能化は、やがてソーラーシステムを併用したFB S工法などへ、さらに生活熱と太陽熱だけで24時間全館18℃を維持できる「無暖房住宅」へと発展する(2005年)。機械に頼らず、つねに快適な室内空間を得ようとする試みは、すでに完成の域に達している。08年には、より低価格でそれが実現できるよう、住まい手が仕様などを選べるエコハウスシステムを開発、グリーンシードハウスの名前で人気商品となっている。

モチベーションを
維持するために
初心を忘れない

建てる住宅の高品質化を進める方で、相澤さんが目指すのが「ハートのあたたまる家づくり」だ。そのためには、会社と職人たちと建て主の3者が一体になることが大切。会社のスタッフが誠心誠意取り組むのはもちろんだが、「お客さんが喜んでくれるように」職人たちが気を配り、「本当によくやってくれた」と建て主が職人たち一人ひとりに感謝する、そんな関係



長野展示場にある「グリーンシードハウス」のモデルハウスのひとつ、「ハートオブイングランド」を中心に撮影した。写真右/トイレと浴室。左/洗面所。ゆったりとした水まわり。

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。



Data

HOKUSHIN HOUSE

北信商建(株)

本社所在地 長野県上水内郡
飯綱町芋川15-40
電話 026(253)6655
代表取締役社長 相澤英晴
会社設立 1978年
従業員数 60名
事業内容 総合建設業
(一般注文住宅)
売上高 39億円
(2009年3月期)
URL <http://www.hokushinhouse.com/>

長野展示場グリーンシードハウス 「ハートオープイングランド」の TOTO使用機器

浴室 システムバスルーム
スプリングタイプ
洗面所 洗面化粧台
クリアZシリーズ
トイレ ウォッシュレット一体形
便器Zシリーズ



写真上／「ハートオープイングランド」の外観。中／インテリアテイストの多様さも特徴。右奥の英国調「ハートオープイングランド」から左手前に南欧風「イタリアーノ」、和モダン「倉楽(くらら)」が並ぶ。下／「イタリアーノ」のリビング。

を目指している。
そうしたモチベーションを維持するため、社員や職人たち、さらに協力会社の人間まで、「人生または仕事に対するモットー」を各自が表明し、胸に下げたIDカードに記載する。冒頭の 節は、相澤さん自身のカードに記されたモットーだ。若いスタッフならともかく、ベテランの職人が自分のモットーを考へることなど、こうした機会でもなければまずありえない。体裁を繕って、かっこいいことを

言えば、それは自分に嘘をつくことになる。おのずと自分を見つめ直さなければならぬ。そして自分に誠実であるためには、いい加減な仕事はできない。
「ちょっとしたことだけれど、ものをつくるのが好きだからこの世界に入ったんだ、という初心を思い出してもらえれば」と相澤さん。みんなものづくりが大好きなはずだ、という相澤さんのまわりの人たちへの信頼にほかならない。「一人ひとりが自立して、個性を

生かして働いてくれればいい。社員、そして協力会社のみなさんは給料などの体系は違っても、そういう仲間の集合体として家づくりができれば、きっと心もあたたまる、本当にあたたかい家ができる」相澤さんが続けてきた技術的工夫と揺るぎない周囲への信頼は、渦となつて周囲を巻き込み、大きな家づくり集団へと育っている。あたたかい家づくりへの思いは、北信商建という会社の枠を超えて広がりがつづけている。

取材 文 市川幹朗 写真 山下恒徳



HOKUSHIN HOUSE Aizawa Hideharu

相澤英晴(あいざわ ひではる)／1955年長野県生まれ。長野県立長野工業高等学校卒業。地元建設会社で実務を経験し、77年に独立。78年に北信商建を設立。あたたかな家づくりに情熱を注ぎ、2005年には信州大学工学部の賛同を得て「無暖房住宅」を開発。無暖房住宅のパイオニア的存在であり、長野県下はもとより他府県からも建築依頼が来るという。趣味は「家づくり」と語る。

写真上／「ハートオープイングランド」の玄関ホールに立つ相澤社長。左奥の玄関扉部分でわかる壁の厚さは40cm。これが北信商建が誇る「無暖房住宅」の要となる。下／1階のリビングダイニングキッチン。



デイヴィッド・アジャイ展「OUTPUT」

David Adjaye, OUTPUT

ロンドンを拠点に活動する英国人建築家、デイヴィッド・アジャイ氏の展覧会を開催します。アフリカ出身のアジャイ氏の建築の特徴は、素材と色彩の大胆な組み合わせと光の操作によって、シーケンスごとに移り変わる多様な空間体験を生み出している点にあります。それは、日々変化する生きた都市の状況を建築体験として表現することであり、アジャイ氏自身がこれまでアフリカ大陸、英国、日本といったさまざまな地で経験してきた、多彩な光の体験から導かれたものです。日本での初のアジャイ展となる本展では、「光と都市」をテーマに、デイヴィッド・アジャイ氏の建築活動を俯瞰します。初期の代表作から最新プロジェクトまでの主要な作品を網羅し、アジャイ氏の現在の到達点を紹介します。



デンバー現代美術館
Museum of Contemporary Art/ Denver

T字型の天窓で
つながれる
多層のヴォリューム
(写真=Dean Kauffman)

2007, Denver



アイデア・ストア・
ホワイトチャペル
Idea Store Whitechapel

パザールの雑踏と連続する
カラフルな
ガラスのモザイク
(写真=Tim Soar)

2005, London



エレクトラ・ハウス
Electra House

閉鎖と開放
相反するふたつを
合一させて
(写真=Lyndon Douglas)

2000, London

都市を 「体験」する 建築

文/ピーター
アリソン(編集者)
翻訳/土居純

デイヴィッド・アジャイは、今日の英国を代表する建築家のひとりです。2000年に彼が設立したアジャイ・アソシエイツは、現在、英国はもとより欧州本土、ロシア、中東、米国、アフリカでもプロジェクトを手がけています。

タンザニア生まれの彼は、アフリカの美術や建築をはじめ、現代アートや音楽に至るまで、じつに多方面から影響を受けています。彼はまたアーティストとの協働も頻繁に行っており、クリス オフィリやオラファー・エリアソンといった著名なアーティストと組むこともありました。アジャイの建築はこれらの影響により、機能だけでなく、空間体験そのものにも力点が置かれています。

アジャイが頭角を現したのは、ロンドン市内に立つ連の住宅作品によってでした。なかでも「エレクトラ・ハウス」(00)と「ダーティハウス」(02)の2作はよく知られています。これらの住宅はいわば、相反するふたつのものを合一させた建築といえます。たとえば、人目を引く外観にもかかわらず周囲に溶け込んでいるとか、視線の入る隙もないほどに閉じた外観なのに内部は穴だらけとか、あるいは平凡な材料でできているのに妙に色気があったり、という具合に。これらのデザイン戦略が、アジャイが現代建築について博識であることを示唆すると同様に、その洗練された素材使いもまた、彼が陰影に富んだロンドンのストリート・ライフを知り抜いていることを物語っています。

アジャイは、少数の空間モデルによって多様な要求に応ずることのできる建築家です。そのひとつの表れが「エレクトラ・ハウス」とロンドンにつくられた新しいタイプの図書館「アイデア・ストア・ホ

次回予告

卒業設計
日本一展
2010

本年3月に行われた学生有志団体「仙台建築都市学生会議」と「せんだいメディアテーク」が共催する「せんだいデザインリーグ卒業設計日本一決定戦」は、建築設計のプロフェッショナルを目指す学生の卒業設計日本一の作品を決定する一大イベントです。同決定戦の上位受賞者の作品を中心に、これまでの参加作品アーカイブ 審査過程のビデオなどを今年もギャラリー 間で再構成、展示いたします。

会期 2010年10月19日(火)～
11月6日(土)

詳細はギャラリー 間webサイトをご覧ください。

ギャラリー・間

所在地	東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3階
電話	03(3402)1010
ファクス	03(3423)4085
開館時間	11:00～18:00 (金曜日のみ19:00まで)
休館日	日曜日・月曜日・祝日(ただし 10/31、11/1、11/3は開館)、 夏期休暇8/8(日)～8/16(月)、 および展示替え期間
入場料	無料
アクセス	▶東京メトロ千代田線 「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分 ▶都営地下鉄大江戸線 「六本木」駅下車 7番出口徒歩6分 ▶東京メトロ日比谷線 「六本木」駅下車徒歩7分 ▶東京メトロ銀座線・半蔵門線・ 都営地下鉄大江戸線 「青山一丁目」駅 下車徒歩7分



David Adjaye



写真=Ed Reeve

デイヴィッド アジャイ (David Adjaye) / 建築家
1966年、タンザニア ダルエスサラームに生まれる。79年にロンドンに渡り、サウスバンク大学と英国王立芸術大学(RCA)にて建築学を学ぶ。RCA在学中、交換留学生として京都に滞在した経験をもつ。93年RCA修士課程修了。同年RIBAブロンズメダルを受賞。2000年アジャイ アソシエイツを設立。アーティストの感性と視点をそなえた建築家として、建築界のみならず各界でも高い評価を受けている。07年に大英帝国勲章(OBE)を授与。



モスクワ経営管理大学院 SKOLKOVO

Moscow Management School SKOLKOVO

ロシアの大地に置かれた
巨大なディスクと
ガラスのビーム
(写真=Ed Reeve)

2010, Moscow

ワイトチャペル(05)にみられる数々の共通項でしょう。前者で使われた箱形のフォルムや吊り構造、回遊性、長細いヴォイドといった要素が、いずれも規模を拡大されてこの公共建築に応用されています。ロンドン市内のプロジェクトに向けて編み出されたこれらの手法は、05年以降にはほかの地域でも試されていき、米国においてアジャイは「デンバー現代美術館(07)」と、さる美術蒐集家の住宅「LNハウス(08)」を完成させました。さらに、アジャイ作品としては目下最大規模となる「モスクワ経営管理大学院 SKOLKOVO」が、本年中に開校される見通しです。彼はまた個人プロジェクトとして、アフリカの都市建築に関する包括的な調査を終え、その成果を設計の仕事にも反映しつつあります。

アジャイとアジャイ・アソシエイツらしさが顕著に表れているのが、「デザインには、あらゆる規模の生活に彩りを添える可能性が潜んでいる」という、彼らの理念でしょう。アジャイ・アソシエイツ開所10年目にして開かれる本展「OUTPUT」は、ギャラリー 間のために独自に計画されたもので、建築模型、新規に制作された図面、実作の写真が一堂に集められます。出展作品の選択基準は、日本の観客にアジャイ・アソシエイツの実践法を実験してもらえらるもの、ということ。彼らがいかにして多様な物理的・文化的背景のもとで種々の条件や期待に添えているかを、各人の目で確認してください。これらの作品群は、デイヴィッド・アジャイの全実作を大局的に紹介すると同時に、今後の方向性も示唆してくれるものとなるでしょう。

中村好文
普通の住宅、
普通の別荘

普通の住宅、
普通の別荘

TOTO出版のお知らせ

TOTO出版

book 1

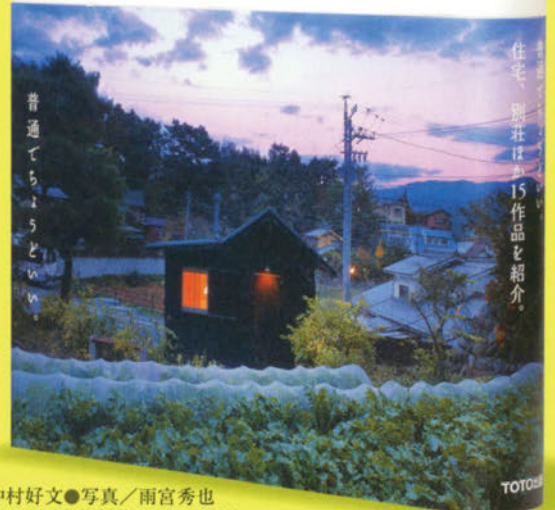
中村好文 普通の住宅、普通の別荘

本書では、人々の身の丈に合った住心地のよい家づくりで定評のある、建築家・家具デザイナーの中村好文氏が手がけた住宅と別荘ほか15作品を紹介しています。<気張りもしないし、気取りもしない。背伸びもしないし、萎縮もしない。無理もしないし、無駄もしない>、そんな「普通のもの」をキーワードに30年にわたって住宅をつくりつづけてきた中村氏初の作品集となります。カメラマンの雨宮秀也氏による家の雰囲気そのまま取めた撮り下ろし

の写真と、中村氏書き下ろしのほのほのとしたスケッチ図面からは、それぞれの家のあたたかな空気が伝わってきます。

文筆家としても活躍する中村氏が作品ごとに設計時の思い出を綴ったエッセイ「普請の楽屋裏」や、施主とのインタビュー録などテキストも多数収録されています。住み手の人柄や暮らしぶりを垣間見ながら作品を紹介した本書からは、中村流家づくりのぬくもりがじんわりと伝わってきます。

- 著者/中村好文 ●写真/雨宮秀也
- 定価/2,940円(本体価格2,800円+税)
- 体裁/菊判 ハードカバー 320ページ



TOTO出版

住宅、別荘ほか15作品を紹介。

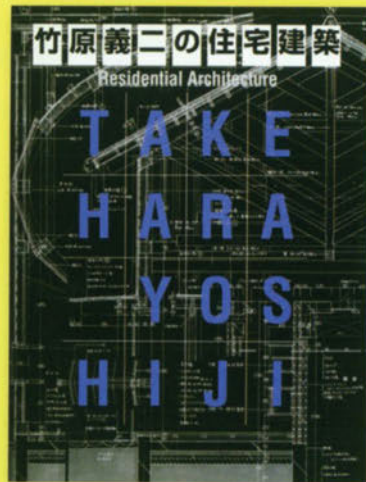
TOTO

book 2

竹原義二の住宅建築

Yoshiji Takehara Residential Architecture

待望の初の作品集。写真家・絹巻豊氏の写真と、竹原氏率いる無有建築工房が丹念に描き上げた手描き図面により主要15作品を紹介し、藤森照信氏、花田佳明氏による竹原論を取録。巻末には150作品の作品データリストと書き下ろしスケッチを掲載。建築の原点から逸脱することなく、建築にまつわる手もとの技術を新たに展開することで日本の住宅建築の質を昇華させつづける竹原建築の魅力に迫る1冊です。



- 著者/竹原義二 ●写真/絹巻 豊
- 定価/3,990円(本体価格3,800円+税)
- 体裁/B5判変型 ハードカバー 320ページ

book 3

DAVID ADJAYE OUTPUT

デイヴィッド・アジャイ アウトプット

今、最も世界的に注目を集める新進気鋭の建築家デイヴィッド・アジャイの日本初の作品集！ 世界中で作品をつくりつづけるアジャイ氏の最新作を含む主要28作品を紹介し、光と影の印象を大切に撮りためたモノクロ写真と図面による、スパイスのきいた作品集。建築家の新世代を感じるエッセイと、彼の素顔に迫ったインタビューを取録。巻末では、彼が個人的に続けているリサーチ「アフリカ都市の建築」も紹介しています。



- 著者/デイヴィッド・アジャイ
- 定価/2,520円(本体価格2,400円+税)
- 体裁/A5判 ソフトカバー 304ページ

▶ www.toto.co.jp/bookshop

お詫びと訂正

前号53ページ「南アルプス市健康福祉センター」の建築概要の施工欄で、「(衛生 空調) 大梁設備、甲栄興業」が抜けていました。ここに訂正してお詫び申し上げます。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など
知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。



reddot design award
winner 2010

TOTO

TOTOの最新情報

TOTO news 1

TOTO news 2

「レッドドット・デザイン賞」を受賞しました

デザイン浴槽「ルミニストバス」が、「レッドドット・デザイン賞」を受賞しました。レッドドット・デザイン賞はドイツのノルトライン・ヴェストファーレン・デザインセンターが選定を行っている国際的なデザイン賞で、iF賞(ドイツ)、IDEA賞(アメリカ)と並ぶ世界3大デザイン賞のひとつです。2010年は、57カ国1,636社から4,252商品のエントリーがあり、そのなかですぐれたプロダクトとして評価されました。



「ルミニストバス(スーパーエクセレントバス WLシリーズ)」半透明の素材(エポキシ樹脂)を透過した幻想的な光に包まれる新感覚の浴槽。ガラスのようなひんやりとした感じがなく、素材独特のなめらかな肌ざわりです。

「TOTO CORPORATE REPORT 2010」を発行しました

TOTOグループの企業活動全般を紹介する「TOTO CORPORATE REPORT 2010」を発行しました。企業理念から2009年度発表した100周年に向けた長期ビジョン「TOTO Vプラン2017」まで、TOTOグループの事業活動や目指す姿を、あらゆるステークホルダーのみなさまにわかりやすくお伝えすることを目的とした冊子です。また、財務や環境に関するデータをまとめた別冊「財務・CSRセクション」を8月に発行予定です。

TOTOホームページではPDFでの閲覧や送付申し込みができるほか、CSR活動などの詳細情報を開示しています。



TOTO CORPORATE REPORT 2010

セラのお知らせ

▶ www.toto.co.jp



cera trading news



洗面器/KE124020 124,950円(税込) 水栓/HG31614 30,345円(税込)

ドイツKERAMAG社の洗面器「iCON」を2010年8月より発売します

「iCON」は、高い品質と多彩なバリエーションが魅力のドイツKERAMAG社の洗面器シリーズです。

直線ラインの美しさが特徴で、さまざまなライフスタイルに対応できるようサイズバリエーションも豊富にご用意。

洗面器に水栓をふたつセットできる1,200mmから、トイレの手洗いにぴったりな380mmまで4サイズを品揃えします。

カタログのご請求は、セラトレーディングホームページ、または電話・ファクスにてお申し込みください。

▶ www.cera.co.jp

セラトレーディング	Bookshop TOTO	TOTO出版
●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階 地下1階 ●電話/03(3796)6151 ●ファクス/03(3402)7185 ●営業時間/10:00~18:00 ●定休日/日曜日 祝日 夏期休暇 年末年始	●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)1525 ●定休日/日曜日 月曜日 祝日「ギャラリー 間」休館中の土曜日 夏期休暇 年末年始	●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)7138 ●ファクス/03(3402)7187 全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。



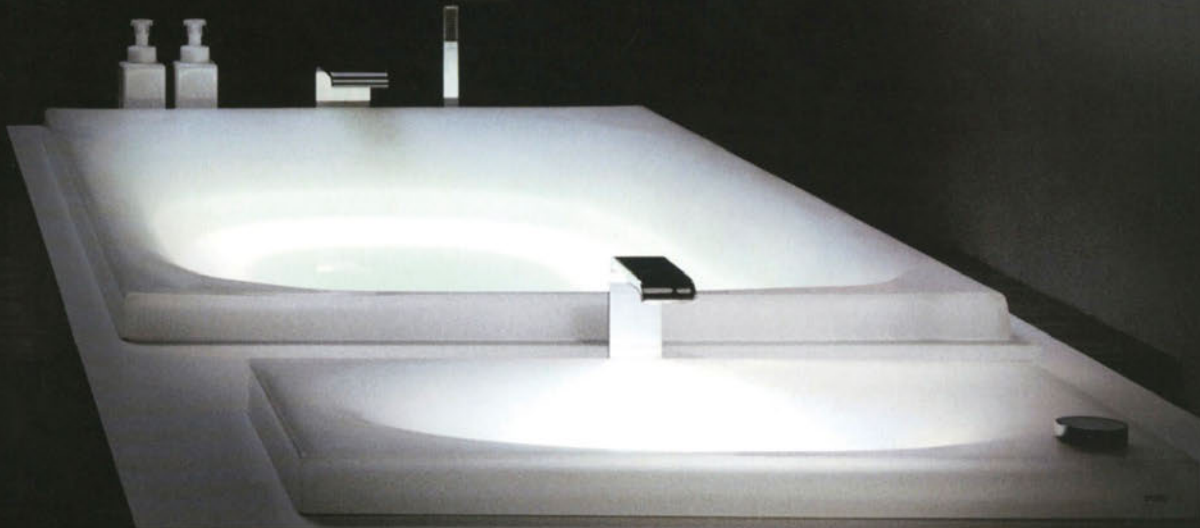
次号『TOTO通信』は2011年1月上旬発行の予定です。

アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線 半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

TOTO通信 2010年夏号 第54巻 第3号 通巻491号
発行日:2010年7月1日 発行所:TOTO株式会社 コミュニケーション推進部
〒154-8540 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TEL.03(5451)1131



この情報誌には特殊なインクを使用しています。印刷に際しては、環境に配慮したインクを使用しています。



TOTO NEW MATERIAL

静かなる存在感

毎日の暮らしの中で、主張しすぎず さりげなく、使う人の気持ちにそっと寄り添う。高い品質と性能を備え、空間表現を乱さない。空間の創り手の、使い手のイメージを触発する「素材」としての水まわり設備。それが、TOTOの目指す水まわり商品です。



浴槽 ルミノストバス(スーパーエクセレントバス WLシリーズ) 2010年度 reddotプロダクトデザイン賞受賞
洗面器(クリスタル)+洗面水栓 NEOREST SERIES /LE 2009年度 reddotプロダクトデザイン賞受賞
[商品についての技術的なお問い合わせ] TEL:0570-01-1010
受付時間: 平日9:00~18:00/土・日・祝10:00~18:00(夏期休暇・年末年始を除く) URL: www.com-et.com

TOTO

TOTO通信のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。